

クラス会および近況だより

老いて思い出すまま

谷口 順一 (昭10)

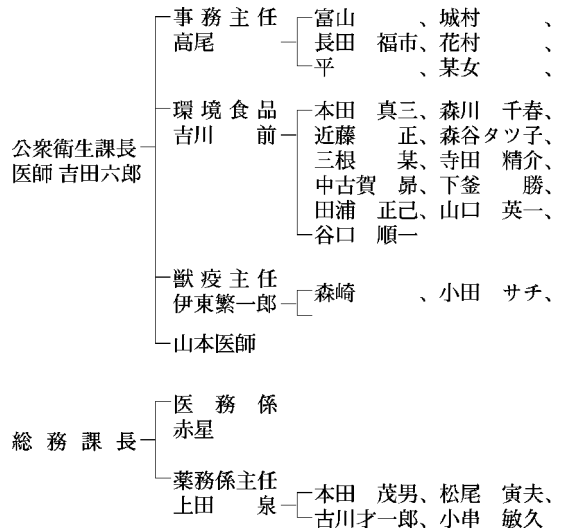
長崎県庁勤務

昭和22年5月3日夜、桜馬場に住居しておられた長葉での恩師小沢敏夫先生をお訪ねして、持参した履歴書をお預けして適当な勤め口がありましたらとお願いして帰宅す。

同5月28日夜又お訪ねして就職口をお願いしたところ「炭坑でもと言うのなら長崎県庁に教え子で衛生部に松永一君が居るから相談してやろう」と親身になってもらい、翌日だったか「松永君に話したら履歴書を出してみないかとのことだったから、君が直接松永君に届けないか」との事でした。翌々同月31日、当時出島の現税関の建物内に県衛生部は借り住いをしており(昭和21年11月18日衛生課が衛生部に昇格し、部長は草野医師)総務課、予防課、公衆衛生課の三課から成り、総務課勤務医師松永一氏を訪ねて宜しく頼み、履歴書を同氏を紹介者とし当局に提出してもらった。

同年7月6日、県衛生部から連絡あり、明日県衛生部の吉川前公衆衛生課衛生係主任の許まで出頭するようこの事。(私の免許証は引揚まで所持していたが乗船に際して身分の知れるのを恐れて焼き棄てたので、)あわてて自宅の前隣に居住の中島茂男氏(長崎医大薬専同窓3年先輩で県立瓊浦中学化学教諭)の薬剤師免許証を見せてもらい、これを見本に写しを作製して同7月7日早朝県衛生部に出頭した。吉川主任(長葉を大正9年卒の大先輩であった)の面接種々質問の後、吉田六郎公衆衛生課長に引合された後、同部総務課長席に案内引合わされた。その結果直に採用の手続を取る事になった。

同7月27日、日曜日であったが県衛生部から通知で「採用と決定したから出頭すべし」との事。翌28日県衛生部に出頭、直に「公衆衛生監視員を



命ずる、月手当壱千七拾円給与、長崎中央保健所勤務。昭和22年7月26日「長崎県衛生部」の辞令をいただき直に課員に引き合わされた。県下保健所勤務 石橋昌一、黒川 清、一ノ瀬英親、

その日から勤務した。そして退庁に際し公衆衛生課にDDTの配給があって、私も50オンス缶を頂だいし、出勤早々初めての恩恵に浴したのだった。

出勤翌日から忙がしくなった。これまで化学工業に従事していたので今からは衛生行政と化学技術面の勉強が必要で、うっかりしては居られないのだ。

増俸通知書

谷口 順一

1. 金貳千壱百円也

右の通り発令に付御通知します

昭和22年7月26日 長崎県衛生部長

翌8月5日、衛生監視員の取去した重曹の定量

分析を命ぜられ、直に分析に取掛かり、その日丸一日を費やして終了し、翌6日次の通り成績を報告した。

試験成績書

1. 食用ソーダ 壺種

販売者 長崎市 治屋町乙22
新日本産業株式会社

但し右は昭和22年7月25日付梅経防第1033号を以て試験依頼に係る分

成分表 (%)

重炭酸ナトリウム	71.65
炭酸ナトリウム	18.31
硫酸ナトリウム	3.61
炭酸アンモニウム	3.11
塩化ナトリウム	2.71
その他	0.61

同22年8月10日、課内錬成海水浴で時津海水浴場行となったが、私は小瀬戸の仏様参りのため、課内錬成に同行できなかった。

同8月12日から15日まで生鮮物集荷荷受会社関係現場の指導監視の实地訓練を本田真三枝技官に受けた。

翌8月16日は吉田公衆衛生課長指導のもとに衛生監視員全員大場町魚市場に至り検査実習を行なう。

翌々8月18日、公衆衛生課から親放れして、長崎市今魚町長崎県立長崎中央保健所に配属されて長崎中央保健所に出勤し、長田一夫所長に着任申告、所長は同所薬局の責任者に命じ、直に小川新



平氏と事務の引継を済ますよう指示すると共に同所員全員に紹介された。

以上の面々であった。

同8月20日、下釜 勝氏が当所に配属になり着任、直ちに各職員に帯同紹介した、そして私の補助と試験室を見てもらう事とした。

昭和22年9月5日、衛生部から、米軍払下げで入手されたペニシリンが初めて当保健所に配給され、直に性病患者にこれを施用した。しかし話に聞いていた程の効果が見られないため更に施用したが淋菌に対する目立った効果は見られなかった。試用医師は島田、吉村両医師であった。

同9月10日午前中、食品衛生監視員の資格試験が取り行われ受験し、午後から玄関に最も近い第一クリニック室を移して、理化学試験室に模様替して開設した。その後毎日のように氷菓の収去を実施して細菌検査を行なった。

同9月13日、衛生部の指令に基づき任官するための手続書類を提出することとなった。

同22年11月20日、次の辞令を受けて三級官に任官した。

谷 口 順 一

長崎県技術吏員に任命する

三級に叙する

昭和22年11月20日

長崎県技術吏員 谷 口 順 一

八号俸を給する

技師に補する

長崎県長崎中央保健所勤務を命ずる

昭和22年11月20日 長 崎 県

長崎県技術吏員 谷 口 順 一

食品衛生監視員を命ずる

昭和22年11月20日 長 崎 県

通 知 書

長崎県技術吏員 谷 口 順 一

11号俸を給する

昭和22年11月20日附右の通り発令になったから通知する

昭和23年2月20日 長崎県総務部長

焦 眉 の 急

松尾 康夫 (昭12)

近頃我が家の室温は35度以上になる日が多くなった。今年はどうしてこんなに暑いのかと、つい口にする。せんないことと思いがらの愚痴である。熱中症の多発で救急車の信号も悲鳴に近い。全国的な猛暑のなかで、同級生諸兄は、どんな案配であろうかと、ひょっと気になる。全員に、といっても、私を含めて生存者は9名に過ぎないが、早速電話をかけてみた。結果は予想のとおり、今直ちにどうこうという方はいないようで、まずは一安心。具体的に言えば、元気で全く異常なし、といわれた方には文句なしに即脱帽であった。内臓の異常はないが、足が駄目で、ほとんどベッドの上とか、いつも病気勝ちで社会とはほとんど無縁という方は気になる。その他は一病息災で普通の生活ができる状態であった。今年か来年に米寿を迎える、高齢者たちだから、何もかも立派だとは言えないのが当然のことで、あまり気にするのも如何なものかと思ったりしている。

さて話は変わるが、構造改革を目指した政策が実施の段階に入ったことはご承知のとおり。改革なくして成長なしと、すごいハッパをかけられた公の組織では、その大波をどのようにして乗り切るかという大変な事態に直面して四苦八苦している。当然のことながら、長崎大学も例外ではない。己に法人化され、あらゆる面で改革へ向けての大

事業がどんどん進行しているやに承っている。

先日、長薬同窓会から、いただいた暑中見舞いに、「大学も自律と競争の時代に入り、さらなる高度化、個性化を図らねばならない。同時に同窓会は支援団体としての位置付けが明確となり、組織の強化を図らねばならない。云々」という趣旨が訴えられていたが、胸にジーンとくるものを感じた。

大学ご当局が新体制のもとで、学生の指導や研究に更には経費の捻出に苦心惨胆されている。それがなんとなく、ひしひしと伝わってくる。

母校の浮沈にかかわる大難航を自然にして我々同窓会員も、拱手傍観してよいはずはない。何らかのお手伝いができぬものか、この87歳のボケ老人でも焦眉の急を感じている。そこで、「笑止千万この老いぼれが、なんば言うとか、そげんことは先刻承知の助だ。まかせとけ」と失笑を買うかもしれないが、実はそれを期待しての妄言である。

諺に、「火事場の馬鹿力」というのがある。常ひごろは、いかにも無力そうであるが、いざという時には予想もしない大力を出すものらしい。

<へなちょこも修羅場じゃ変わる金時に>

同窓の皆さんのご活躍とご健勝を祈りながら筆を擱く。

妄言多謝

クラス会の思い出

河野 信助 (昭17)

昭和15年4月、旧制長崎医科大学附属薬学専門部(通称薬専)に入学した私共は、戦時中のため6ヶ月短縮されて、17年9月に卒業した。今年12月で卒業後62年と3ヶ月が経過したことになる。

最初のクラス会をしたのは25年後の42年の秋で、場所は茂木の二見荘だった。当時はまだ仕事に追われ、クラス会を楽しむ気分には程遠く、5年目

毎に長崎で行った2回目の昭和52年になって、ようやく来年から毎年やろうと云うことになった。

堀君の発案でクラス会名を「滔々会」とし、命名後第一回を岡山で開催。滔々は水の流れるさま、同時に私共が薬専第20回の卒業だから、10+10も意味している。その後は長崎と長崎以外の地を一年おきに選んで、毎年夫人同伴で滔々会を開催し

た。長崎では牟田君のプラザホテルに宿泊、翌日は近郊で学生時代の思い出を楽しんだ。長崎以外の地では箱根、唐津、京都、由布院、高山、宮島、四国、山口、奈良、天の橋立などそれぞれに世話人を決めて行い、楽しい思い出を沢山に残すことができた。第20回滔々会は平成9年（1997）の長崎でした。

この頃になると、お互の年令も70代後半で参加者が次第に減少した。特に神谷君、井手君をはじめ末永君などの級友を失い、体調をくずす人も多く、最近では長崎以外の地に行かず、毎年ルークプラザホテルに集っている。

実は一昨年の滔々会を最後にするつもりで昨年は開催しなかったが、まだ希望者があって今年は10月19日開催。参加者は野本君、松下君両夫妻と

牟田君と私の僅か6名でした。世話人として、今年の開催を後悔している今日この頃です。



前列 右より 牟田、松下夫人、野本夫人
後列 右より 松下、野本、河野

おそらく最後のクラス会

田崎 和之（昭22）

世の中、長寿社会といっても、喜寿を過ぎて傘寿に近い齢となれば、体の何処かに不具合があってもおかしくないし、今日はピンピンしていても明日はコロリと逝くかも知れません。

5年前に長崎でクラス会をしました。又ここいらでやっておかないと、声をかける方もかけられる方も、何時ダウンするか判らないということで、生き残り30名全員に予告の案内と希望を問いました。この秋か来春かの問いに、来春の指定は皆無でした。待てないからこの秋に早くやれということでしょう。長崎か雲仙温泉かの問いには、全員雲仙でした。曜日問いに、この歳になると何時でもよいの中に、是非土曜日という希望がありました。1人でも多く参加出来るように土曜日を選びました。

そこで、雲仙の有明（ゆうめい）ホテルで、11月13日（土）に行くことにしました。紅葉には1週間遅いような感じがありましたが、好みの部屋を希望通りに確保出来ました。全く返答のない者もいましたが、いろんな体不調の為に残念ながら欠席という便りも貰いました。

丁度半分の15名の参加希望があつて、まずまず

かなと思っていましたら、日が近くなると本人や連れ合いの体調が悪くなり11名になりました。同伴歓迎にしたら夫人5名が加わりました。

ホテルが送迎バスを出して呉れるというので、長崎駅と諫早駅の待合室を集合場所にして、全員バスの中で談笑しながら雲仙に向いました。

途中、小野島の校舎跡に立ち寄りしました。道路から校門に入るところがガードレールで遮断されて脇の酒屋の駐車場になっていました。その脇から中に入って、記念碑の前で写真を撮りました。給水塔は相変わらず残っていて、その下辺りが赤トンボ広場と言われているらしい。

お山雲仙に登るにつれても、紅葉の赤い色が見えません。紅葉の時期が過ぎて散ってしまったのかと思いつつも、葉が散ってしまったようにも見えませんでした。後で女将の話によると、今年は度々の台風で木の葉が傷んでしまつて、紅葉色に成りきれなかったそうです。

ホテルが開業百周年ということで、宴席の料理は100年会席という豪華なメニューを案内されていましたが、この歳になれば量より質で願いたいと、前もって話しておきましたら、多からず少な

からずの程好く美味しい料理でした。

卒後57年目、白髭・禿頭の爺さんになっても昔に帰って、酒量は落ちましたが、敬称抜きの方言で賑やかに語り合いました。終戦直前に学徒動員で工場（水俣）にいて空襲にあった時のこと、彼は待避壕の中において座る位置が僅か1メートルの差で爆弾に吹き飛ばされるのを免れ、怪我だけで助かったものの、其処から遠く逃げて行き暫く姿が見えなかったのが、我等一同は彼は死んだと思って「俺たちは彼の為に黙禱をした」などと、彼本人の前で思い出を語っていました。

校歌と応援歌のコピーを全員に用意して、校歌は全部、応援歌は第一・第二・第三を2番まで歌いましたが、もう忘れたと言う者がいました。同席のご夫人から、この応援歌はどんな時に歌うの

ですか、と尋ねられました。言われてみれば、第一応援歌の2番の「白衣は赤く血に染みて 戦庭深くまるぶとも など強敵を屠らざる」と歌われると、戦争の歌かなとも取れます。「野球でもスポーツは、相手を倒して勝たなければなりませんから、やはり戦いの応援歌です。」と答えておきました。

朝食も昨夜と同じ部屋で、一同揃って摂りました。

帰りは、送迎バスで諫早駅経由で長崎駅に送って貰いました。

今後、クラス会の案内はクラス全員にはおそらく出来ないだろうと思いますが、それでは寂しいので、集まれそうな者の中で声を掛け合ってはどうか、と思っているところです。



小野島 校舎跡にて

卒後55年記念クラス会について

吉岡 龍三 (昭24)

24年卒の私たちは、5年を節目として（たまには2年でしたこともあります）同期生会を開いておりましたが、本年は55年を迎えましたので、記念クラス会を、長崎市茂木町の割烹旅館・恵美で去る10月30日に開催しました。

写真でご覧のように16名の方が参加されました。一泊したので夜遅くまで歓談でき、料理は魚中

心でしたが、さすがに長崎は魚どころだけであって、新鮮で盛りだくさんで、遠来の友人からたいへん喜ばれました。遠く奈良から北島君が、また宮崎から酒匂君（実に55年ぶり）が参加され感激しました。

なにせ久しぶりにお会いする方が多いので、話は尽きないのですが、会の最後には、北島君の巻

頭言の朗誦のあと校歌を斉唱し、有意義な一夜を過ごすことができました。

実は私たちは長葉でも珍しい卒業生なのです。まず戦後第一回の入学生であり、また第一回薬剤師国家試験の経験者です。次に男子学生のための最後の卒業生です。(次年度から女子学生が入学してきました。)

今回の60年になると、私たちが齢80を越え、集まるのが大変だろうということで、この会を最後に全体的な同期会にピリオドを打つことにしました。

それでも2年置きぐらいにしたらという意見も

でました。

長崎グルッペは、毎年成人の日の前に新年会を同じ恵美で実施しておりますが、それは続けて行きますので有志の方の参加を希望いたします。(福岡から日帰りできます。最終長崎発J R21:45 バス21:30)

また、私たちは長葉24会という規約を設けて、主として亡くなられた友人に僅かではありますがご香典をさしあげておりますが、これも残金25万円が費消次第止めることにしました。

当日の写真を添えますので、下欄の氏名と参照して懐かしんでください。



前列左より 松本、吉田(旧筒井)、吉田、森、横尾
中列 吉岡、野方、久田、塚本、築城
後列 北島、大石、麻生、酒匂、宇野(旧向井)、西依

長崎地区の26卒会は

中倉 敬昭(昭26)

今年も過去の人間が集まりました。それは平成16年3月27日(土)生き残った長崎地区の26卒であります。意義深く、喜ばしいことです。今回も無責任でよろしい、と言う世話方のすすめで筆をとってみました。

今年の諏訪神社該当者は3名でした。先ず圓ちゃんの本田圓次君が傘寿なのであります。つまり日本の男性平均寿命を、元気で軽く通り越した

のであり、全くお見事であります。彼は永らく教職に携わり、校長先生も経験したという、カクシャクたる姿には頭が下がる思いです。

次に学生時代から、マンドリンの名手であり、書道教授もやり、昨今は写真芸術に没頭していると聞く、芸術家の永江喜一郎君が喜寿です。もう一人は、26卒代表の同窓会理事を永年お願いし、勿論この会の代表で、何かと世話方を惜しまない

篠田英夫君が喜寿です。

例年は2月の寒い時期でしたが、寒いのは苦手バイという老人の声に、世話方が配慮してくれたのでしょ。

諏訪神社の参拝後は、例によって、セントヒル長崎で昼食、そして碁会、夕刻時に祝賀会、会食雑談と凡そ定めのコースです。写真は、その時の諏訪神社参拝と、セントヒルの一室であります。

実は諏訪神社の待合室で、私は何げなく「テレビによくでる桜の立山公園というのは、ここから遠いのであろうか」と問いかけたら、世話方の一人である立石正文君が、昼食後、彼のマイカーで案内すると言うのです。彼の邸宅も、その通り道であるというのです。立石君の親切さには、涙がでました。佐世保の坂道に勝るとも劣らない、あの長崎の坂道を彼の車で私だけ案内してもらい、桜には未だ一寸早過ぎの立山公園を知る事ができたのであります。

さて、セントヒルでの碁会のメンバーは、本田圓次、篠田英夫、黒田隆次の3君と、偉そうに指導的立場にあり、と言う、佐世保の貞方典君と私、中倉敬昭の5名。

特筆すべきは、黒ちゃんの黒田隆次君でした。明らかに上達しているのです。私は確実に敗けました。

聞けば諫早の旧制中学で同級生であり、現在諫早市で開業医の斉藤先生（6段）という方に時折、置碁で打ってもらい指導を受けているというのです。

いかに老化しようとも、もともと頭が良く、出来が良く、物事に情熱がある人は、何をやらせても、上達するという証明なのでありましょ。但し今回、貞方君との対局では、貞方君の眩惑戦法にしてやられたらしいので、次回を期待しているところです。

途中から、立石正文、峰唯信、江頭文昭、永江喜一郎の4君が揃って計9名。夕刻は該当者の祝辞、会食、雑談です。前回の会報でも説明していたように、アルコール類を飲む者が少ないので、その分セントヒルの儲けは少ないのですが許してもらいましょ。

ところで私自身ですか？勿論、避けたい老化現象ではありますが、それは不可能。大部ガタがきていますので、いわゆる身分相応の、つつましい生活を心掛けていますのであります。

只、老いて残った趣味の囲碁だけは、とっくに限界過ぎと解ってはいても、ボケ防止よ、とへ理屈をつけ、新聞棋戦などの会に参加して居ります。今年も長崎新聞主催では私にバカヅキが舞込んで、佐世保のパート代表（6名）となったので、行けるうちに行っておこうかと去る9月20日（敬老の日）に再び長崎まで。長崎三菱会館での県大会に参加し、軽くひねられて帰りました。何しろ県代表の打ち手ともなれば、私のようにいい加減ではないのです。生活がかかっているのでは、と思わせるくらいの恐ろしく強烈な打ち手であります。

ともあれ、私ども過去の間人は楽しくできればよいのです。





追憶 わが畏敬の師 故西田貞治翁 (昭9)

服部俊明 (昭28)

(現 東北化学薬品KK顧問)

思えば厳しい上司が大阪に来られたものだ。

一度彼が支店長室から出て、各部課の机を歩けば居並ぶ社員は襟を正して身構えたものだ。どんな下問がいつどこで誰に落ちるか分からない。

専門誌は勿論、新聞雑誌にもよく目を通していないと返答出来ず大目玉の雷が落ちる。全員の前で上司にも大恥を搔かせる事になるのである。

何と言っても翁はどこにでも通用する人材の育成に専心された。中でも管理職を対象とした西田学校は毎月初め定期的に開かれていた。松下政経塾発祥以前の話で洪庵や諭吉の適塾の名残りがあった。

教義の要は経営管理論に始まり、大学、中庸、孫子や時局にも及んだ。部下の統率育成に当たったの基本姿勢をソクラテスやプラトンの問答し続けられた。特に今でも心に残り私を支えているものは3H主義「心：強力な精神力・健康な体・頭脳：一を聞いて十を知れ」が口癖であった。新分野の開発には少数意見の尊重と、幸運を探り当てる能力とアンテナを磨けと説いておられた。

翁は豪放磊落、骨太の人脈を持っておられた。業界は言うに及ばず山村雄一阪大総長や政財界では松下幸之助を始め多くの知己を得て、肝胆相照らす親交を深めておられた。それ故に業界では道修町の権威として恐れられていた。翁は「己を尽くし、考えて、祈る」が彼自身の悟りきった生活信条とも言っておられた。

部下に対しては「愛、信頼、寛容」が基本の基である。「出藍の誉れと、人造りには、峻厳にして温情は溢れる如きものでなければならない」と心を鬼にして諭された姿は今も私の胸に甦る。翁は多くの叙勲にも輝かれ、位人身を極めた後、会社を勇退されて大分に隠居されたが、余生を楽しまれる間もなく、足早に鬼籍に旅立たれた。しかし、人の二三倍濃密に充実した気概と情熱の生きざまは多くの人の心に今も生き続けていく事だろう。

願わくば天下国家の安泰と、長業同窓会の発展を見守って頂きたいものである。

以上

学部および同窓の皆様には益々ご清栄の事とお慶び申し上げます。

また同窓会報については毎年大学の近況、金城鉄壁に改築中とか同窓諸氏の動静など喜ばしく拝読致しております。

この4月から国立大は独立法人としてスタート致しました。これに関しては中島薬学部長先生はじめ全教・教員のご苦労は如何ばかりかと拝察しております。誠にお世話様ですと申し上げる外、言葉を知りません。お説の通り薬剤師過剰時代を、目前に控え生き残りを掛けての競争は一段と激しさを増す事でしょう。

さて私事ですが、遠い仙台に在って、毎年同窓会のご案内は頂きながらも勤務の都合や、やばうで日程が取れず残念でございます。心ならずも

おんぶに抱っここの役立たずの会員で申し訳ありません。

昨年は一念発起して関東支部の総会に出席致しました。その節は本部から西脇金一郎会長もお越し頂き、当地の富安一夫会長にもお目にかかれて大変光栄な一時を過ごしました。それは単なる懇親会だけではなく、各界でご活躍の同窓の先生方の手作りの研究発表会も併設されていました。

どなたも優れた見識と目的意識を持った素晴らしい研究成果の発表でした。今までの一般論では各界でビッグに活躍する諸先輩を後輩が誇りに思うのが常でしたが、今回はスーパースターの後輩に恵まれた事に、逆に先輩が誇りに思う結果にな

りました。これはもう笑いばなしにもならない話と恥じ入る次第でした。

卒業後50年に及び会報を一方的に受け取るだけでしたが、残りが短いせいかわ歳を重ねると、何故か故郷が恋しくなり追憶の情は一入です。

そんな訳で色々な思い出の中から、前に勤めていた会社での貴重な思い出話を小文に致しました。

昭和9年卒の故西田貞治翁・当時常務だった大先輩のほんの一部の話です。この中からこんな先輩もおられたのかと、何かを同窓生として汲み取って頂き歴史の一ページに申し送る事が出来たら望外の幸せに存じております。

オリンピック開催年とクラス会

近藤 基 (昭31)

今年昭和31年卒クラス会は卒業48周年、4月10日(土)11日(日)の2日間、北九州市で開催された。第28回アテネオリンピックの年と重なった。昭和27年入学の年は、第15回ヘルシンキオリンピック(日本が16年ぶり、戦後初の参加)、卒業の昭和31年は第16回メルボルンオリンピック(南半球で初の開催)、我々のクラス会は4年ごとの分かりやすいオリンピックの年に全員集ろう、関東、関西、博多、長崎ブロックで持ち回り、節目は(10周年、20周年(第21回モントリオール)30周年)は長崎市で開催が、いつしか2年ごとになり平成になって毎年開催となった。

現役で活躍中、又、悠々自適の元気な諸姉姉、参加者22名、交通の便の良い宿の小倉駅前リーガロイヤルホテルに14時集合、まず北九州市小倉区の人気スポット、小倉城、城公園、松本清張記念館めぐり、かつての公害工業都市からの脱却変貌ぶりを確認願った。

宵の宴は、北九州市屈指の枯山水庭園を持つ、観山荘別館で、宮崎さんによる記念撮影。残桜を観ながら、幹事の歓迎挨拶、昨年開催地幹事山口さんによる乾杯音頭で開宴、新たな試みとして出

席者全員による2分間スピーチを願った。自身の思い出、信条、趣味、健康、やむを得ず出席出来なかった友人の近況と話題豊富で、楽しく過ごし、さらなる友情を深めることが出来たと思う。最後に来年49周年を横浜で50周年を長崎市で開催と決定、本村幹事の力強い一本締めで1次会は終了。2次会は、リーガロイヤルホテル幹事室に場を変えた。かつての酒豪も歳には勝てず翌日に備え早々の解散となった。2日目はレトロ門司港めぐり、JRで小倉～門司港へ移動、九州鉄道起点0哩標前、重要文化財に指定された門司港駅舎を入れて記念撮影、黒川紀章が設計した、高層マンション31階にある門司港レトロ展望室で休憩、美しく変化する海峡のパノラマ360°を眺め、はね橋(ブルーウィング)横より土星をイメージした双胴の観光船ヴォイジャー号に乗船出航、下関唐戸港経由、下関水族館、海峡ゆめタワーを右に眺めながら関門海峡クルージング、昨年NHK大河ドラマ「武蔵と小次郎」の決戦場となった巖流島に上陸し散策、80分の楽しい船の旅であった。遅い昼食は海峡ダイニングで、再会を約し解散となった。



昭和32年卒クラス会だより

後藤 達元 (昭32)

今年は台風の多い年で、その影響で雨のクラス会になりました。思い出深いそして変わり行く長崎の地で5月15～16日に、米寿になられる一番ヶ瀬先生、喜寿になられる奥様ご夫婦をお迎えして開催されました。我々も古希となり、何かと忙しい身であり又心身に不自由を感じる年にもかかわらず総勢18名の参加をいただきました。

15日(土)は晴れていれば軍艦島(端島)沖サンセット・ディナークルーズで長崎鼻に建設中の女神大橋の下をくぐり、香焼ドック、伊王島、高島、端島と巡り、夕日を眺めての食事を期待していましたが台風の余波で湾内だけのディナークルーズになりました。しかし湾内からの長崎の街の夜景を楽しみながらの食事、それから豪華客船ダイヤモンド

ンドプリンセス号が処女航海に向けて三菱ドック岸壁に明かりをつけて横着けされている様子は、今の長崎を感じる約2時間のクルーズでした。あと喫茶「銀嶺」にて先生から全国を巡られたお寺の塔の写真、奥様より手作りの七宝焼き小物入れのプレゼントをいただき、楽しい語らいの夜を過ごし宿への帰路となりました。

翌16日(日)台風はそれでしたがやはり雨模様でした。宿のJRホテル長崎をあとにし出島ワーフ、水辺の森公園とぶらり散策に出かけましたが、小糠雨降るとはならぬ土砂降りとなり、大浦の四海桜での買い物そして早めの昼食をとり解散。次回幹事は千葉の深山氏にお願いし、伊豆方面での再会を約しそれぞれ家路に着きました。



今も続いている薬草とのお付き合い

三浦 博史 (昭33)

7月末に急病で入院、沖縄でのクラス会(11月8日~10日)への出席はとても無理だろうと、しぶしぶ予約をキャンセルすることにしました。ところが、その後、思いのほか快復が順調で、有難いことに10月にはほぼ元どおりの普通の生活に戻ることができました。となると、待ちに待っていたことがあります。それは、花を楽しみながらの長崎周辺の山歩きです。好きな植物を眺めながらだと、単独での山歩きも淋しくないし、少々歩いても不思議なほど疲れを感じません。植物と付き合い合えば付き合い合うほど、好きになれば好きになるほど、深く知れば知るほど、野山の植物は私に強い摩訶不思議な力「気」を送ってくれます。この「気」が、気力だけでなく、衰えた体力までもしっかりカバーしてくれるのですから、私にはなくてはならない薬籠中の秘伝薬のようなものです。

4年の卒論の教室は衛生、専攻科と助手時代は生薬、助教時代は放射薬品、長大退職後は有明高専物質工学科と分野は変わりましたが、専門として選ぶとすればやはり生薬。当時、生薬には高取治助先生、河野信助先生、大橋裕先生が居られました。直接の指導教官である河野先生は山が大好きで、学生と一緒にキャンプにも行きました。実験材料の植物集めでも野山をよく歩いていたし、山好きが醸成されて当然の環境でした。でも当時は植物の名前はそれほど知らず、本格的に名前を覚えるようになったのは、何が切っ掛けだったか忘れましたが、自然保護運動に係わるようになってからだと思います。昭和47年に「長崎県の自然を守る会」が結成され、初代会長が植物分類学で著名な長大名誉教授の外山三郎先生でした。常任理事には、植物関係では植物生態学が専門の伊藤秀三先生が、山岳会関係では長崎県山岳連盟の役員が居られました。私もメンバーの一員でした。この活動の中で、長崎勤労者山岳連盟(労山)とも深い繋がりができました。数年後「守る会」は解散しましたが、今でも労山の仲間との付き合いは続いており、山仲間との交流、山での経験は植

物調査に大いに役立っています。図鑑で調べてもわからない場合、植物を持ってよく外山先生のお宅に伺ったものです。先生はわざわざ植物図鑑を出してこられ、見比べながらきちんと再確認した上で植物名を教えて下さったのには頭が下がりました。薬草関係では、「長崎の薬草」などの著者である高橋貞夫先生からも薬草観察会で民間薬となる多くの薬草を教えて貰いました。薬学教育で学ぶ薬用植物といえば、漢方薬で使われる植物が中心ですから、民間薬として使う薬草となると独学で学ぶしかありません。しかも、普通見かける大抵の野外植物が民間薬として使われており、民間薬となる薬用植物(有毒植物もあわせて知っておく必要がある)の名前を憶えるだけでも大変です。

長いこと薬用植物観察会の講師をして下さった高橋先生の後を継いで、昭和61年の第二回市民健康フェスティバル(現在のふれあいフェスタ)から、毎年、市薬主催の薬用植物観察会で私が説明役を務めるようになりました(雨天ならば中止)。今年は「2004ふれあいフェスタ」のプレイベントとして薬用植物観察会が彦山で行われました。参加者は約50名。長薬出身では、クラスメートの西協同窓会長、山中薬局の山中国暉・みちよさんご夫妻(昭43)、中村博市薬会長(昭45)ほか数名が参加されました。勿論他薬出身の薬剤師さんも多数参加されています。

健康志向、自然食品、健康食品ブームの中で民間薬に興味を持つ人が増えています。

薬剤師にとって民間薬の知識は専門外、自分たちの責任で利用すればよいで済むものでしょうか。民間薬は民間薬としての良さを持っています。また、民間薬への興味を漢方薬への関心へと向けることもできます。たかが民間薬と馬鹿にはできません。

長崎には身近に気軽に登れる山があつて有難いですね。それに熊に襲われる心配もありません。植物の名前が分かるだけでぐっと親しみがわき、花、薬草、山菜を求めて野山を散策するのが一層

楽しくなります。薬剤師さんの中で観察会の指導
ができる人が大勢育ってくれることを願っていま

す。歳、体力を考えると私もいつまで続けられる
かわかりませんし。

昭和34年卒業生同窓会「三葉会」に参加して

神原 正 (昭34)

今年（平成16年度）の同窓会は4月24～25日、
一泊二日の日程で岩国（錦帯橋）、宮島（厳島神社）
の2ヵ所の観光地で開催されました。参加者も多
く（21名）、2日間とも好天に恵まれた大変楽しい
旅行となりました。

1日目は、新しく掛け替えられた錦帯橋・岩国
城・燕返しの佐々木小次郎等見どころいっぱい
でした。夜のホテルでの宴会では、2回目の参加と
なりました私は新人ということで最上席に座らせ
ていただき少々うれ気味でしたが、卒業後45年振
りとは思えないくらい元気で若々しい皆様の顔
を見せていただき感激致しました。

2次会は部屋で夜おそくまで会話が弾み賑やか
でした。

2日目は宮島観光で皆さん元気にしっかり
ウォーキングしてきっとよい運動になったと思
います。昼食は名物「あなご飯」を食し、フェリー
で本土に渡り午後1時半解散となりました。なか
なか参加出来なかった私の為に地元で同窓会を開
催していただき、遠方から来ていただいた皆様に
感謝しますとともに、次回も全員にお会い出来ま
す様に皆様の健康を願いつつ私の感想文を終わら
せていただきます。



「近況…昨今思うこと」

伊藤由紀子（昭36）

昨年、長い間勤めた調剤薬局を退職し、薬の業界と縁が薄くなった。責任感から解放され、ゆっくりした時間が過ぎている。

薬学部入学は、女性でも技術を身につければ将来役立つのではないかと進んだ道であった。お陰で私の人生の大半を薬剤師として歩んだ。入学当初からいわれていた薬剤師の悲願「医薬分業」も徐々に軌道にのり、分業の発展を我が身を持って体験した。長い道のりだった。思い出は山程あるが、仕事は勿論、家事育児と周囲の助けがあったればこそ今を迎えられたと感謝している。

さて、今回は仕事を持つ女性の子育てについて、私の感じた事を書きたいと思う。私たち女性薬剤師は、専門職故昔からこの問題に直面してきた。今よりもっと社会的なサポートは少なかった。家庭か仕事か更に育児か仕事か選択を迫られた人も多かったと思う。併し周囲の環境に恵まれ、子供を立派に育て、充実した立派な仕事をされた方も大勢いらっしゃる筈である。

現在、多くの女性が社会に進出し、男性と肩を並べ活躍している様は、隔世の感がする一方、女性ならではの難題に直面しているのを身を持って感じている。身近な例で申し訳ないが、私には2人の娘がいる。男女雇用均等法施行後、総合職として就職し都会で暮らし始めた。結婚して子供が出来るまで、順調に仕事をして来た。併し出産後、復職して事情が変わった。新たに子育てという仕事加わったのである。つれあいも仕事と家事の両立を支えるため協力を惜しまない。子供を保育園に預け、まず直面したのが予期しない子供の病気である。保育で預ってくれない。保育中の病気は呼び出されるし幼いので入院することもある。

たちまち有給休暇はなくなってしまう。年令的に責任のある仕事もまかされる様になった。当然、残業、出張、泊りこみの研修等も出てくる。育児と重なるとこれも負担になる。ベビーシッター等随時雇っても都会に親がいない若い夫婦には荷が重い。何度双方の親がかけてくれたことか。他人が見れば当たり前かも知れないが、その度に、行政その他のサポートを望んだものだ。だが子供が小さい内はまだ良い。学齢期になると又状況が変わる。学童保育も3年生までとかまた環境も余り芳しくない。更に子供の先を見すえた教育も必要となり、女親が仕事を持つのは限界かなと私には思えてくる。都会に住む友人たちは、共働きの子供夫婦のために孫の面倒を見に日参しているという。

とに角、周囲のサポートがなければ女性は子育てしながらの納得のゆく仕事は無理かも知れない。娘たちの姿を見ながら痛感している。今、政府が少子化の原因をさぐり、対策を練っている様だが、まだまだ実感として娘たちは恩恵を受けてない様に思える。身近な人たちのサポートを社会的なより具体的なサポートに変えていかなければ、女性は安心して子供を産み育てていく事は出来ないと思う。今政府が考えている男女共同参画社会など理想的だが、子育て中の女性が男性と平等に参加出来る人はどれ程だろうか。所詮、絵にかいた餅の感がする。長い目でそんな社会の到来を待つしかないのである。

それでも娘たちは、自分のため、家族のため子育てをしながら、社会の一員として働いている。私も時間はたっぷりある。声がかかれば、孫と遊ぶのを楽しみに機上の人となるのである。もっと女性が働きやすい世の中をと念じながら……。

37年クラス会たより

荒木 弘章 (昭37)

昨年の福岡に引き続き、本年は、10月23日歴史の都奈良で開催しました。台風襲来に心配しながらも、遠く南は沖繩(喜納さん)、北は埼玉(中西君)を含め、24名の多くの仲間が集まりました。

当日、早めに参集した者10数名は、早速、薬剤師であるからにはと、薬師寺へ。薬師如来、月光・月光菩薩の穏やかなお姿、天平の姿を偲ばせる東塔、光り輝く西塔の外、ラッキーにも開帳されていた平山画伯の30年間の大作：玄奘三蔵の壁絵を鑑賞した。敵そかな唐西域に胸打たれる一方、アルカイードによるパーミアン石窟大仏の破壊を恨む。

更に、今、売り出しの奈良街を徘徊、アチコチに開館している街の博物館を覗き込んで、歴史を垣間見た。その中には、150年も続いた薬局で、お茶の接待に一息、木製の薬研を発見し、ビックリ等々。

夜、いよいよ宴会。久し振りの再会、お互いに、それなりの生き様が見られる。静岡と佐賀を股に掛ける香田君、相変わらず波瀾万丈の池田君、FPとして年金問題を突く坂田君、ギャラリーまで作り楽しむ秋田さん、工場勤務からUターンの早崎君、プロパーから薬局勤務へ転職・悠々自適の退職者・親の介護に励む者等々、それぞれの近況を聴かせて貰い、大盛会であった。

その勢いを、そのまま、二次会へ。又、ロマン

チストの女性軍は、ライトアップされ、幻想的な奈良公園猿沢の池付近を回った後、再合流、居酒屋で秀阪さん差し入れの下関フグを肴に、焼酎飲み飲み飲み、深夜まで話は続いた。名残惜しいものの日替わりの時間も迫り、来年の鹿児島での再会を祈念し、散会となった。

翌朝は、体力にモノを言わせて、本年世界遺産に指定された熊野古道を目指す女性軍を見送る。熊野三社巡りを楽しみ、新宮泊まりで、来るべき将来を期して、おしゃべりに花を咲かせたようだ。残された男性軍の中には、羨んで、同行を願う者もいたが、さて、来年はどうなるか。男性軍は、希望者10人ばかりで、秋色いっぱい奈良公園の東大寺、春日大社、興福寺を巡り、それぞれ帰途についた。

今回の同窓会は、関西在住の林、高井、中山、松崎、荒木の5名が幹事を務めた。数度のコミュニケーションを含めた準備で、参加者の満足を得られたものと自画自賛。

最後に、特に、今回の同窓会は、忘れる事が出来ない思い出になってしまいました。と言うのも、二次会の真っ最中にTVで、中越地震が起きた事を知った。余りの悲惨さに、ビックリした一方、優太君の偉大な生命力の強さに、勇気を貰った感じがします。人生、何があるか解らないが、決して、諦める事はない。



37年長大薬学部卒同窓会 2004年10月23日 於奈良

昭和38年卒 卒後41年同窓会 報告

土田 拓生 (昭38)

同期の仲間40名が卒業して今年41年が経つ。学生として過ごした4年間に対してその10倍の年月を経たことになるが、短く且つ遠い彼方にあるはずの4年間の印象は何と強烈であろうか。もう何度となく集まっている同窓会でも未だに当時の新しい事実や忘れられていた事柄が掘り起こされて賑わうことがある。前回の同窓会は2年前に丁度おくんちの時期に長崎に集まり、一度も足を踏み入れたことがなかった“花月”を利用するという豪華版であったが、今回は関西で11月19日(金)と20日(土)に開催することになった。毎回場所選びは悩ましいが、今回は中野英昭君が何度か利用経験を持つ京都の中心から少し離れた厚生年金施設“ウエルサンピア京都”を利用することになった。ここは学研都市京田辺市の小高い丘の上であり、周辺には山や林が広がって敷地内にスポーツやレジャー施設も持つリゾートホテルである。

初日19日(金)は午後4時30分に集合(男性13名、女性11名、計24名)し風呂などで一服した後、6時から大広間で中野英昭君の司会により同窓宴会を始めた。

まずは出席者の再会を祝し久保多都子君のにぎやかな発声で乾杯した。これは彼女(旧姓今井)が学生時代の名簿のいの一番であったことと明るいキャラクターであること、それにクラスの男女構成の数だけでなく力関係も勘案してのことであった。

開会の挨拶は何ら気苦労や細やかな配慮、素振りを表に見せず走り回って準備万端、我々は感謝感謝の小倉敏弘君の口上で一気に学生仲間の雰囲気となった。

なごやかな雰囲気の中、各人の近況報告はそれぞれの暮らしぶりが披露され興味つきないが、お互いの励みになることが多い。年齢が60を越して仕事から離れたこと、第2第3の仕事に取り組んでいること、年金生活を始めたこと、趣味を楽しんでいることなどであるが、健康への留意の意識が強くそれぞれに元気である。

年齢柄からか今回の共通の話題は“こける”であろうか。段差もないのにつんのめる、信号が青になり歩き出したらバツリこけて恥ずかしかった、何でもない所でこけて左手骨折。極めつけは会社を早期退職してアーチェリーに打ち込んでいた白石浩彦君である。前回の同窓会の話では、アテネオリンピックのメダリスト山本に勝ったこともあり国際大会を目指しているはずであった。今回も日焼けした顔でスポーツ然として出席しており、次の北京オリンピックに向けた意気込みを聞けるものと期待していた。

「どうだ、その後の活動ぶりは？」

「アーチェリーのことか？ あれはもうやめた」

「なんだ、もうあきらめたのか」

「(下をむいて) うん、やめた。この前、高校生の大会で審判をしていて矢が放たれたら審判は走るんだけど、その時下に引いてあるロープに引っかかってこけるんだよ。女の高校生の前ではずかしいよ。だからやめた」

「そうか、そりゃもうそういう年だもんな」

「そうだな、だから今度はマウンテンバイクにしたよ」

「……(一瞬静かになる)。あれはきついよ。もうやめたら」

「いや、きのう注文品が届いたよ。慣れるまで最初は尻が痛くなるそうだ」

「……(尻だけですむかな)」

次回が楽しみである。

少し変わったことで話題になったのは青木郁君が長楽同窓会 福岡支部(浦陵会)の会長に推されていることが紹介された。同窓会がどうしたら盛り上がっていくか青木君の情熱にみんなが期待するところである。

2次会は別室で飲み物、つまみ類、参加者のおみやげを持ち込み、はずむ話しは続いた。10時半には一端解散し、後は部屋割りした小部屋で午前様となった。

2日目はバスをチャーターして京都と奈良のお

寺巡りを楽しんだ。人里はなれた岩船寺の本堂では赤い衣の一木造阿弥陀像の前で住職の話の聞き、庭では改修で朱塗りになった三重塔が周辺の深い緑や色づいた茂みに映えて鮮やかであった。そこから道々に通る人の心を和ませてくれる石仏に立ち止まりながら浄瑠璃寺まで当尾の里の散策は「ああ、来て良かった」である。

2日前の雨で林道はしっとり、くっきりで、木の葉の緑はいろいろに、色づく葉っぱもちらほらと、竹林の中の木漏れ日、小鳥の澄んださえずり、ほっとするほど清らかな小川のせせらぎ。国宝の九体阿弥陀如来像や三重塔がある浄瑠璃寺を訪ねた後、その門前にある「あ志び乃店」で手作り自然食材の山菜料理で昼食をとった。

午後は奈良に入り、あまり観光コースには入っていない新薬師寺（新はあたらしいではなく、あらたかの意味だそうで天平時代の建造）を小倉幹

事長お勧めで訪れたが、この日はテレビ撮影に遭遇した。真っ暗な本堂でライトに浮かび出る国宝薬師如来像は厳かな響きを見る人に伝えてきた。この日の映像は来年1月10日午前中に1時間に亘り朝日放送で放映されるという。さらに東大寺（2月堂、金堂…大仏はやっぱり大きかった）、興福寺国宝館を回りお寺参りを終結した。

近鉄奈良駅であわただしく解散しそれぞれに京都、大阪へと名残惜しくも散っていった。

クラス40名が欠けることなく集まれるのが我々の誇りであったが、2年前に残念にも森本（旧姓永吉）郁子さんを失った。残った全員が一層元気に過ごし2年後には米子在住の松本（旧姓門脇）悦子君にお世話願ひ山陰で再会するのが楽しみである。

小倉幹事長には大変お世話になりました。又、機会があればお願いしますよ。



三九会卒後40周年同窓会

藤木由香子（昭39）

卒後40年を記念して、39回生の同窓会をしました。
会場はハウステンボスと学生の時よく行った雲仙
でした。
40年をさかのぼって楽しい3日間を過ごしました。
其のときの模様をご覧ください。

平成16年5月28日3時ハウステンボス内ホテル
ヨーロッパロビー集合で、三九会卒後40周年同窓
会が始まった。参加者男性5名、女性8人。まず
初日の宿泊となる、フォレストヴィラで一息つく。

29日の2時ころから雲仙へと移動する。諫早、
愛野、小浜を経てこの日の宿泊場所雲仙観光ホテ
ルへ。生憎の霧のため視界は利かない。宿近くの
原生沼や地獄を散策して、温泉で汗を流す。新し
いメンバーも加わって歓談に花が咲き、遅くまで
語り合う。30日は濃霧のため仁田峠への有料道路
が閉鎖された為、ホテルで天皇陛下が宿泊された
貴賓室など見せてもらったりしてすごす。予定を
変更して島原経由で帰る者、そのまま諫早経由で
帰るものなどに別れ、解散となる。3日間の長崎
同窓会は楽しい思い出を残す旅となった。



パレスのバラ園



花に囲まれて



宴会もたけなわ



ロビーにて

参加者（男性）：鈴木、開、磯田、野口、棚林、田中、（女性）：山田、高木、副島、田村、貞包、中村、胡田、藤木

ベルギー、フランダースの犬のアントワープへの道

富永 義則 (昭44)

今回はブリュッセルを首都とするベルギーの話。ゲルマンとラテンの2大民族の融合したベルギーは“ヨーロッパの心臓”と呼ばれている。今回の学会はそのベルギー北部の町、アントワープで開催された。ここは日本ではおなじみの、あの“フランダースの犬”で有名なところ、是が非ともルーベンスを訪ねたいところである。

2004年6月28日、台風6, 7号一過の後で、梅雨の中でも運よく快晴に恵まれての日本脱出となった。まだ6月なのに連日30度を越す真夏日が続いていた。ものの本によるとベルギーの6月は日本の4月ごろの気候と聞いていた。絶好の避暑になる。今回の学会への参加はハンガリーでの第5回以来5回目の参加で、常連の参加者をはじめかなり知りあいができ、学会の雰囲気にもなれてきたところであった。しかし、今回ほど疲労を感じたことはなかった。学会の準備もいつもよりは早めに始め、参加の手続きも万全にしたつもりであった。長崎から関空を経てベルギーのアムステルダム空港までの長い旅路、この12時間が今回ほど長く感じたことは無かった。4月からの新転地でも仕事等のこともあり、少々疲れが残っていたのだろうか、それともそれなりの歳になっていたのか、妙に緊張し、体調が芳しくない。機内での2回の食事にも気を使い、12時間がこんなに長く感じた旅行はこれまで経験が無い。しかし7~8時間も経つと体調も大分回復し外の景色も目に入る様になってきた。テレビの画面でみる飛行航路からするとバルト海近くにきている事がわかる。デンマークからオランダに架けて海は茶色になっている。これはヨーロッパの大河の河口に近いためだろう。しばらくすると地図でおなじみのあの堆積した列島や長い干拓の堤防がみえた。海を仕切っている巨大な堤防もここからは一本のヒモの様に見える。さらに高度が下がると、森や牧草地、それに整然とした畑、それを囲むクリークがはっきりと見える。これがオランダからベルギーまでずーっと続いている。一切山や丘らしき

ものはなにも見えない。こんなにはっきりと外が見えたのもめずらしかった。外を見ているとそれまでの体調不良の感覚は薄れていった。まもなくアムステルダムの空港に着いた。ベルギーに入るには、このアムステルダム・スキポール空港から電車でいく必要がある。この電車のホームは空港の地下にあり非常に便利になっている。ここからヨーロッパの各地に行ける。ホームで待っている間も、フランス夫人から、パリに行くのはこのホームで良いか聞かれる。列車番号が同じなのでこのホームで正しいことを告げると色々ときげに話をする。10日間近くヨーロッパを旅行してきたとのこと。また別の人からはデン・ハーグに行くにはこのホームで正しいかと聞かれる。しかしデン・ハーグがどこに有るのか知らない。まもなくパリ行きの黄色タリスが到着した。これまでもユウロスター等何回かヨーロッパの電車に乗ってきたが、タリスは今回が初めての経験となる。あらかじめ日本の旅行代理店での指定席予約で簡単に席を見つけることができた。ヨーロッパの駅ではいづこも改札がない、電車に乗った後、しばらくして検札がある。今回の急行では途中、飲み物とケーキの無料サービスがあった。2時間の間に2回このサービスがあったが、弱気になり1回しか取れなかった。車窓からみるオランダの風景は見慣れている気になる。風車こそ見えないが本でよく見たような風景である。ほとんどが四角に区切られた牧草地、そこには10~20頭位の白黒や白茶の牛、それに馬がいる。それぞれの牧草やぶどう畑、それに小麦らしきもの、微妙に緑色が違う、それをまた別の緑のクリークが囲む、緑に囲まれた車窓であった。短く感じた2時間であった。駅はアントワープに着くものと思っていたが、ベルヘムという駅で下車せざるをえなかった。アントワープ駅はここから別の線で行かなくてはならない。そこでどのくらいの距離かわからないままタクシーでアントワープまで行った。14~5分で着いた予約のホテルは、アントワープ駅の真ん前で

1分とかからない距離であった。もうすでに午後7時近くになっているのに、日本の5時くらいの感じで明るい。しかし町は何かごたごたしている。道路も広くない。建物も古いのか新しいのかわからない。人も東洋系から、アフリカ、それに各ヨーロッパ人と、これも雑多、しかし何か明るい自由さを感じる。まだ睡眠を取るには明るすぎる。そこで近くを散策することにした。ホテルでのチェックインを済ませ、あらためてアントワープ駅を見てみると、それは30メートル近い古い大きな石造りの駅であった。1895年から10年かけて建築されたとのこと。プラットホームは6列からなる比較的大きな駅であった。この6本のホームが一つの大きなドームの下にある。よくヨーロッパの駅で見かける風景である。「この駅の向こうは動物園、その横はダイヤモンド博物館、北側の広場は工事中、さらに左側の西は駅前メインストリート、しかし車は一方通行、車道の半分は両側に駐車している車で占拠され、歩道の方はレストランの客席が所狭しと迫出している。さらにあちこちで工事中、なんとも混雑した町である」との第一印象であった。いづこも道路は広くなくごたごたしているが、駅前が特にひどかっただけであった。

ホテルの反対側の店はなにかきらびやかである。この一角があのでルベギーダイヤモンドで有名な町であった。アントワープ駅の地下の駅はダイヤモンドステーションと呼ばれるほど、ダイヤモンドで有名な町であった。駅からずっと高架橋の下は25番と店番号が付いている様にびっしりとダイヤモンド関係の店ばかりである。また、その1キロ四方の周りほとんどダイヤモンド関係の大小の店が並んでいる。世界のダイヤモンド原石の70%以上がここに持ち込まれ研磨されるといわれている。アントワープにある4軒の取引所のうちその3軒がこの駅の近くにあるという。ここにヨーロッパでも有数のユダヤ人社会が形成されている。あの独特の黒い帽子に黒いマントの様な服装をこの町でよく見かけた。この人たちが敬虔な戒律厳しいユダヤ教の人たちであった。またイスラムの人らしいスカーフをした人も多く見かけた。ベルギーは70%以上がカソリックだそうである。

アントワープの町

オランダ国境から30kmほどのベルギー北部にあるアントワープは、日本人にあのアニメの「フランダースの犬」で知られている人口50万の町で、またヨーロッパ有数の港でもある。しかし何と言っても前にふれたダイヤモンドだろう。普通はダイヤモンドとは縁の無い私でも、ショウインドをじっくり見てしまう。挙げ句のはては、研磨の実演にはまりこむ。また見る角度によってきらきらと輝く虹の光に魅せられる。知らぬ間に説明を聞いている。色々な国の方が店を構えているらしい。その中でもユダヤ人の組織が圧倒的に大きいらしい。

このダイヤモンドの次に気になるのが、ネロ少年があこがれたルーベンスの絵だろう。レンブラントは見たことあるが、ルーベンスは淡路島の大塚美術館で数点見ただけであった。その本物がみられる。それだけでもベルギーに来た甲斐がある。ルーベンスの家が、アントワープ駅から港に向かって15分くらい歩いた所に博物館として開放されている。ここにはルーベンスが使用したと思われるタイプの調度品が再収集されている。当然多くのルーベンスの絵が展示されている。あの有名な自画像が心に残っている。しかし、あまり色々みると一つ一つが記憶に残らない。これらの絵の世界一のコレクションとなっている王立美術館の絵には圧倒される。さらに近くにあるノートルダム大寺院のネロ少年を魅了したであろう「キリストの昇架」「キリストの降架」「聖母被昇天」に感激した。やはりこれらの絵は美術館に有るよりも教会に有るのが良い。当然この大寺院の周りは観光スポットになっている。駅からこの寺院近くは歩いて回れる。さらに港の辺まで回ろうとするには観光バスがよい。このバスはアントワープの駅の近くから出発し、おまけに日本語のガイドまで付いていて、1時間半ぐらいでアントワープの町を一周する。

学会参加

参加した学会は2年ごとに開かれ、今回で第9回になる。参加者はヨーロッパを中心に100人位で、それほど大きくない複素環境系の学会である。これまで第5回のハンガリーから連続で参加して

いる。かつては多くの日本人がこの分野の研究に携わっていた。今では大学関係の研究者は少なく、今回も日本から参加したのは北里大学の先生、長崎工業技術センターの人、それに私だけであった。製薬会社や農業関係の会社では現在でも活発に研究されているが、これらの人の学会参加が無いのは若干寂しい感じがする。これも私の宣伝が不十分と反省している。次回はもう少し他に呼びかけてみようと思う。

今回の学会はアントワープ大学のレミラ教授を議長にアントワープ大学で開催された。学会の場所がノートルダム大寺院の近くにあることから察せられるように古い歴史を有するベルギー屈指の名門大学である。しかし、現在の日本と同じく大学の再編統合が進んでいて、9ヵ月前に再出発したばかりとの説明がなされた。学会の場所となっている大学は前回のイタリア、フェララ市の大学や、ハンガリー、ゼンメルワイズ大学のように通りに直接面した建物となっており、この建物が1800年代の古くも貫禄のある建物で町の一角を成している。そこの門を潜ると中庭になっており、その先に学会の場所がある。その3階に受付がある。もちろんエレベーター等ない。学会の参加登録を済ませ、オープニングセレモニーの会場へと進んだ。ここは明日の学会の会場と同じ場所になっている。ここは3階建て3階だから屋根裏部屋になっている。床も板張りにカーペットで、窓は両開きの小さい板張りガラス窓になっている。鉄色レンガの外壁には緑鮮やかな蔦が這っている。屋根は傾斜のある黒褐色の平らな瓦、なんとも言えない趣がある。こんな場所での学会に参加できる幸せを噛みしめておこう。受付には実際の世話をしているバート・マース教授が出迎えてくれた。20分前なのに誰も来ていない。それで前もってe-mailで送っていたパワーポイントの原稿チェックをすることになった。スライドの前半は予定通り、しかし中盤の肝心なところになると大事な写真が写らない、鮮やかな色を見せる予定のスライドなのに、今回の発表は有機電解素子材料についてで、その色が肝心なところであった。実際の色を示してアピールしようと思ったのに、と残念であった。その後も10数枚の写真が全くだめになっていた。しかしこのコピーを持ってきているから

とこの時はそれほど心配していなかった。しかし、その翌日の試写でも写らなかった。後は口頭で説明する意外にないと覚悟をきめた。前夜祭には常連のメンバーがほとんど参加していた。しかし、最も親しくしているハンガリーのマチャシュ教授と、スペインのラビニヤ教授の姿がない。それぞれ関係者に聞いてみると今回は多忙で参加しないとの事、残念であった。それぞれと挨拶を交わし1時間ぐらいでこの場を後にした。

翌日から本格的な学会の始まりである。学会は8時50分から、この時間になると用意された椅子はほとんど満席となっている。アントワープ大学の学長の挨拶、それに化学会の理事と続き、さらに今回の学会の議長レミラ教授の流暢な挨拶が続いた。その後、学会の参加や準備状況等の経過報告がなされ、テイシュラー教授の司会のもとスロベニアのポーランク教授の講演となった。つづいて北里大学の倉沢教授の講演で、先生はエジプトやアメリカでの招待講演の経験も豊富で、今回のフトラジン関係の演題も興味ある内容だった。途中30分のティータイムがあり、午前中の5題の演題も活発な質問で終わった。その後は2時間の昼食の時間となった。レストランはこの会場から歩いて2〜3分のところにある大学のレストランであった。100人ぐら이가楽々に入れるような部屋で、学生食堂とは違い、大学の行事やセミナー、講演会等のために使用されるとのこと。サービスといい、料理の内容といい、一般の高級レストランと比べてもなんの遜色もない。ビールから始まり、白、赤ワインと続き鮭の料理がきて、ここでスペインのようにランチかディナーかと思うようなボリュームの食事ではない。国が違えばやはり食事もちがうと一人で納得しながら、ワインを飲んでいると、大きな皿のステーキがきた。もうパンも食べ十分なような気になっていた。このステーキも他の町のレストランで食べたものよりも柔らかくて美味しかった。しかし、少々食べ過ぎてしまった。


午後からも活発な講演が続いた。日本の学会の様に形だけの座長の質問だけで終わることはない。2日目は午前中が学会で午後からはアントワープ市内観光が企画された。夕方からは学会の場所と同じところになる聖楽堂でのマンダリンの演奏会

に参加した。ここは学会があった場所の1階の部分で外はレンガの壁が緑の蔦で覆われ、内は白の漆喰に天井は古い茶褐色の木造の梁からなり、正面は聖母マリアの像があり、その前が演奏の舞台。それほど広くなく10人位が並ぶと一杯になるような広さを感じられた。演奏はバッハから始まりシューマンと続いていた。演奏者は皆大学の教職員で構成され、100年以上の歴史をもつ、大学でも市でも公認のクラブだそう。この演奏者の中に今回の学会の議長のレミア教授がいたのにはびっくりさせられた。さらにハンガリーから参加していたホイジャ教授がオルガンで伴奏されたのがさらに驚きであった。

3日目はいよいよ発表当日となる。日本からの出発時からの体調不良を少なからず引きずっていたこともあり、これまでの学会よりも緊張してしまった。前者が終わり、司会のオーストリアのウイン大学のハイダー教授の紹介があるときには紹介の内容も聞くことは出来ていた。最初はいつもの形だけの挨拶から始まり、これまでの発表では化学発光についてであったが、今回はこれに加えて電界発光についても話したためにイントロが長くなっていた。イントロの説明も終わり中盤の写真が出てくる場面になると真っ黒な画面だけ、真っ黒な画面が3枚続くことになる。初日の試写のところでこのことはすでに確認はしていたもの

のどきどきであった。しかし、フランスのワーマス教授が状況を判断してか、“マジックの始まりですか”との一言で、すうっと胸の悶えが消えたような感じがした。緊張が取れたような感じがした。「ここに青色、緑色、それにここに赤色があると想像して下さい。この絵は蛍光測定器で、これはグラフです、心眼で見てください」と、もうマジックの世界。後は実際の研究の説明だから、いつもの状態に戻っていたように思う。しかし、最後に長崎や大学、それに環境科学部を紹介する写真も出てこなかったのが残念でした。

学会の最後は午前中で終わった。この間、理事会が開催され次回をどこにするか前日まで決まっていなかった。これまで順調に決まっていたが、主なところはスロベニア、イギリス、それに日本が残っている。最初はイギリスの予定であったが担当者が退職して大学関係者がいなくなったせいもあり、候補地から自然に消えていた。私は帰国の時間の都合で前回イタリアでの理事会には参加できなかったが、その時の話ではフランスも候補地になっていた。しかし理事の一人、ワーマス教授が理事会に間に合わなかったため、スロベニアのスタノビック教授を仮の議長に決め最終日にワーマス教授の出席を待って、それでやっと次回はフランスに決まった。これらの理事会で日本での開催も議論されたが、これまで日本からの参加



**9th International Symposium
on the Chemistry and
Pharmacology of Pyridazines**



Speakers

<ul style="list-style-type: none"> S. Hirata E. Saito T. Kametani P. F. (Fujimori) A. (Fujimori) A. (Fujimori) G. (Fujimori) C. (Fujimori) J. (Fujimori) 	<ul style="list-style-type: none"> S. Van der Stuyven S.K. Lee N. Chikuma T. M. (Chikuma) M. (Chikuma) C. (Chikuma) T. (Chikuma) S. (Chikuma) J. (Chikuma)
---	---

Antwerp, June 30th – July 3rd 2004

<p>Organizing Committee</p> <ul style="list-style-type: none"> E. (Organizing) M. (Organizing) D. (Organizing) A. (Organizing) C. (Organizing) M. (Organizing) F. (Organizing) J. (Organizing) 	<p>Scientific Advisory Committee</p> <ul style="list-style-type: none"> P. (Scientific) G. (Scientific) M. (Scientific) O. (Scientific) S. (Scientific) B. (Scientific) T. (Scientific) C. (Scientific) 	<p>Honorary Advisory Committee</p> <ul style="list-style-type: none"> G. (Honorary) A. (Honorary) S. (Honorary) B. (Honorary) T. (Honorary)
---	--	---

Huis de Colvenier

**9th International Symposium
on the Chemistry and
Pharmacology of Pyridazines**

者が少ないことと、さらに最も重要な理由として全ての物価高が懸念された。この学会の参加者のほとんどがヨーロッパのため、日本までの旅費等の経済的負担の大きいことが心配されている。私にもそれらを援助する資金調達の日処も無い。国際学会を日本で開く事の難しさがここにあると思われる。今回の理事会で私自身が開催の名乗りを上げることは出来なかった。しかし、スペインの

ラビニア教授、それにハンガリーのマーチャシュ教授が強く日本での開催を望まれていることもあり、真剣に日本での開催を考えなくてはならないと思っている。

今回も体調はよくなかったが、それなりに貴重な体験となった。次回のフランスに向けて参加できるように頑張ろう、その気持ちの持続が肝心と思っている最近の心境である。

信州松本での昭和44年度卒業同窓会の記録

富永 義則 (昭44)

今回も昭和44年度卒業の級友達が信州松本市に集まった。これは何時からか始まった2年ごとの同級会の一環で、今回は前回の沖縄での会の後、松本市在住の木下が世話役となって開催されたものである。これまでも長崎はもちろん、福岡、岡山、広島、宮崎、鎌倉、沖縄、それに信州と同級生が居るところを順に廻って同窓会を開いてきた。それぞれの場所での思い出、それぞれの語らいの内容は忘れてきているが、比較的深く胸に残っている。月日の経つのは、光陰矢のごとし、で非常に早い。しかし、どんなに月日が経とうとも同窓会で会ったの語らいには時の隔たりを感じない、何時もそんな雰囲気である。特に最近はお互いの再会を大切にするように気遣っている感じがする。これまで参加されていない方にも、次回からぜひ参加してほしい。

今回の信州での様子を知らせておきます。今回の同窓会は、平成16年6月5日長野県松本市浅間町の「みやま荘」で、先程も触れたように木下の世話で開かれた。日時場所を決めるのに苦労されたようだったが、結果は大成功で、感謝感謝の松本であった。折しも此の頃は日本のほとんどが梅雨の始まりで天候が気になっていた。しかし、前日(4日)の松本市は快晴で遠くのアルプスの山々がくっきり見えていた。山の頂きには未だ残雪が見られる。この天気は明日まで続いてくれと祈る気持ちで、松本空港からみやま荘までバスを乗り継いで行った。ホテルには5時頃着いたが未だ誰も来ていなかった。暫くすると早めに松本入りし

て、市内観光をしてきた松村、山口、赤堀、西村、小坂らが戻ってきた。意外と少ないのに少々気掛かりになった。参加すると思っていたいつもの大和、星野、藤井、それに白石さんがいない。大和と白石さんは直前体調を崩したとのこと、また藤井さんも高熱を出したとのことで参加できないらしい。少々遅れて、内田、島袋の両人が現われた。広本、それに下野親子は翌日の合流と聞いた。それから何時ものようにわいわいがやがやと前夜祭が始まった。食堂で始まった前夜祭だが、もう時間ですよと退席を促されるまで食堂で語らう事になった。その後も一つの部屋に集まり二次会の開演となった。ビールをはじめアルコールは充分ある。沖縄のアワモリを期待しながら、しかしこの日は出てこなかった。島袋さんにこの日もアワモリを密かに期待していたのです。それで宴会が盛り上がりがない訳はない。ここで話した内容の記憶は定かでないので記する事はできない。しかし語らう事は、今回これなかった人々の消息、それに自分達の近況報告等々、話は尽きない。それぞれ同級生の事、皆が気にしています。

5日は朝が早い。6時50分には朝食、7時半頃にはホテルを出発。一台のバスに9人は寂しい感じがした。しかし上高地、それにロープウェイの所までは周りの景色に見とれて人数なんて気にならなかった。

谷深い川沿いの、お世辞にも広いとは言えない曲がりくねった、しかもトンネルの多い車道を、行き違いのバス等にヒヤヒヤしながら、時間はあ

まり気にしていなくて、2時間位だったと思う、焼岳の見えるところまで来た。途中の木々の緑の鮮やかさに見とれながら、これが萌葱色かと感心しながら、あの有名な大正池に着いた。手前は薄青色の澄み切った池、その岸边は萌葱色のタケカンバの木々、その向こうにやや褐色の部分のあるウグイス色の山肌、それにバックは夏の空を思わせる群青、一遍の雲もない、稜線には人陰すら確認できそうな程透明に澄み切った空気、そのような周りの景色でした。ここから梓川沿いに田代橋、ウエストーン碑の横を通って、河童橋の所まで周りの景色を満喫しながら、ところどころで記念写真を取りながら行った。橋の上で皆万歳をした。写真に収めたが、あまりにも小さすぎて分かりづらい。しかし人よりも景色がすばらしい。岳沢にはまだ残雪が見られる。ここでも仰ぎ見るバックは群青色、山は碧緑、それに岩肌と残雪、萌葱色の緑、それに梓川、これは私の力では表記できない。

途中帝国ホテルでコーヒブレイク。10時近くになるともう都会なみの人の多さ、全く噂通り、何だろうと思いつつも、山の頂き、稜線を見ると少々元気なら登ってみたいくなるのも当然のような気がする。理解できる。山のりっぱな売店でそれぞれ買い物をして、途中昼食を取り新穂高ロープウェイに向かった。この頃になるとロープウェイの所には下野親子が来ているとの連絡が入る。



ロープウェイの階段の所で下野に会い、元気か、との短い挨拶で、元気なのを確認して、急いでロープウェイに乗車したような気がする。約7分ぐらいで西穂高の展望所に着いた。ここからの眺めがまた天下逸品、焼岳、笠の形をした笠岳、錫杖岳、鎗ヶ岳、北穂高、奥穂高と360度アルプスの山々が一望できる。笠岳の方には雲が出はじめている。この展望所から少し奥穂高の方角に歩き始めた。残雪がある。穂高の途中の西穂山荘もくっきりと見る事ができた。ここから2時間位で行けるとの話。もっと若い時にくればと思いつつも、しかたがないと諦める。あまりの素晴らしさに言葉がない。ただ感心するだけ。なんと幸せなことだ。天の恵みに感謝、企画してくれた木下さんに感謝、参加した皆に感謝。もう何も言う事ない。

感嘆、感激の上高地からホテルに着いてみると、広本さんそれに病のはずの藤井さんが待っていた。「どうしたの」、と藤井さん。熱が下がったから来たとのこと。

しばらくして下野親子も到着した。さあこれから同窓会の始まりです。後は時の経つのも忘れての宴会。昨晚と同様わいわいがやがやの連続。

二次会は例のごとく部屋でアワモリで乾杯。実に楽しい2日間でした。

次回は還暦、平成18年長崎で行います。皆さんの参加に期待しています。



熊 本 か ら

藤原 邦雄 (昭45)

昭和45年卒の皆さんお元気ですか。今年は6月から長い猛暑が続き、また9月には九州地方はたて続けに3つの台風が上陸する等、異常な天候に見回れました。皆さんのところは如何だったでしょうか。まず、誠に残念なことです。同窓生の岡本(旧姓、岡村)睦子さんが、昨年12月に急逝されたことを記さねばなりません。長崎での前回のクラス会(卒後30周年記念会)では元気な姿を拝見していましたので大変な驚きでした。学生時代の彼女は仲間と共にいて、いつも物静かで清楚な方であったように思います。どうぞ安らかな御冥福をお祈り申し上げます。

さて、私は約5年前に(やっと)長葉を離れ(?)、現在、熊本の崇城大学(旧熊本工業大学)に務めています。50歳過ぎでの転職でしたので骨身にこたえて、まだ完全には慣れ切っていないのが本音です。月並みですが、45年卒には熊本出身はいないと思いますので、私の感じる所を紹介します。熊本は長崎とは距離的には極めて近いのに、内陸的で寒暖の差が大きく、町並みは広く平坦で、車道が多く、かつ分かりにくいという、所謂、城下町の特徴があります。其中にあって、崇城大学は市の西側の池田町の小高い山全体が大学キャンパスになっています。大学は現在、工学部と芸術学部から成りますが、来年度からは新たに薬学部が新設されます。更に各学科が統合されて情報学部、及び(私が所属することになる)生物生命学部が誕生します。大学全体の学生数は約4000名弱、現在の工学部の教授数は100名程度で会議には一同が会するので大変な賑わいです。私は、長崎のころは車で直接薬学部の研究室の下まで乗り付けられたのが、今や山の麓に車を駐車して毎朝山登りとなりますので、これが結構、真夏や真冬にはこたえます。同じ年の先生が何気なく“山登り

がしんどくなると定年間近かなのだそうですよ”と話されて思わず絶句しました。長葉とこちら私大の特徴の違いはいろいろとあるようです。一口で言いますと、私大の職員は教育、研究のみならず学生の面倒(厚生指導、就職、オープンキャンパス、企業訪問、父兄懇談会など)を見ることによりかなりの時間がさかれるのは事実です。私大では学生に対して、高い授業料の分だけ、面倒見を良くし、資質の高い特徴のある教育を行うことが不可欠なわけです。従って、その分、先生方と学生の間は結構親密でキャンパス内ではすれ違うたびによく挨拶をしてくれます。また学生は自ら就職活動に大変積極的に取り組む点も薬学とは違うようです。これは現状では就職がなかなか難しいことを自覚しているからでしょう。薬学部卒は免許がある分有利であることを実感します。私はこちらで初めて1年生から4年生までのクラス担任を経験しました。学生のよろず相談係です。殆どが育ちの良い子供達ですが、たまに難題を持ち込む学生がいます。しかしそういう学生がかえって可愛くなりますからこれもまた(因果は巡る)人生なのでしょう。

私は今夏、長崎出身の学生の父兄懇談会で長崎を訪問しました(?)。驚いたことに長崎高速道を降りたところに長崎港がありました。“3日見ぬま間の桜”でした。遠くにおられる同窓生の皆さん!! 還暦を迎える前に、或はそれを記念して、長崎を思い出し、尋ねて下さい。港の付近の様変わりはずっと感動を与えますよ!! また今年改築され大変立派になった長葉も是非見て下さい。

尚、我等45年卒の次回同窓会は1年延期して、中村博 大兄(現・長崎市薬剤師会会長、同県副会長)のお世話で、平成18年に長崎で行うように計画しています。それまで皆さんお元気で!!

47年卒同窓会イン広島

森 賢造 (昭47)

前回の台湾から3年目の今年11月20日、21日に広島市において卒業後5回目の同窓会を行いました。やっと秋らしくなった広島市に各地から30名の仲間が集まりました。今回は広島市の繁華街にある酔心本店を会場に、午後6時に始まりました。中には卒業後同窓会への出席が今回初めての仲間も顔を見せ、実に32年ぶりの再会になりました。乾杯の後出席者1人ずつに現在の状況報告をしてもらいました。前回の同窓会では居なかった孫の誕生の報告が数人の方からあり、改めて年の流れを感じさせられました。一次会の後は全員で胡講で賑わう繁華街を歩いて二次会に移動、カラオケなどを楽しみながら夜遅くまで昔話や近況報告に

花が咲きました。

翌日は所用で参加できない数人を除いて、朝9時に広島駅を出発し、紅葉が盛りの安芸の宮島に向かいました。今年の台風18号で左楽房が倒壊した厳島神社も修復が進み多くの観光客でにぎわっていました。今年は紅葉が遅くちょうど見頃で、すばらしい天気の下、ロープウェイで山頂まで登り、瀬戸内海の景色と美しい紅葉を楽しんできました。昼食のあと3年後の再会を誓って散会しました。なお次回は卒業35周年に当たる3年後に東京で行う事になりました。

次回はもっと多くの参加者で盛大に35周年を迎えたいです。



参加者名 (すべて旧姓),

後列 森, 梶原, 橋本, 金子, 間瀬田, 岡本, 風早, 村岡 (都), 小笠原, 猪平, 松田,

中列 榎永, 上原, 山内, 大間, 小寺, 宮垣, 芳賀, 中田, 福間, 古屋,

前列 杉本, 住吉谷, 岸高, 岸, 簗田, 池田, 松村, 山本, 加藤

昭和48年卒の卒後30年クラス会便り

渡部（木原）クリ子（昭48）

昨年の平成15年11月2日（日曜日）午後5時から、長崎厚生年金会館（ウェルシティー長崎）において、昭和48年卒後30年のクラス会が行われた。生憎の雨模様であったが、長崎在住の方々のご尽力により、新潟、東京、大阪や四国等からも駆け付け参加者47名という盛会であった。

私は昭和49年6月に医学部原研放射を辞め帰省し、その後11月に上京、ずっと長崎には行かなかったが、久しぶりに、昨年3月、薬学会年会長崎大会に参加する機会を得た。30年ぶりに薬学部まで行ったが、春休み中また工事中という状況で、人影も疎らな状態であった。

学会から帰った後、しばらくして、クラス会のご案内があり、東京在住の数人も参加する情報を得たため、もう一度長崎まで30年ぶりの友人達に会いに行くことにした。

長崎空港へ降り立ったら何と東京組のメンバーが同じ飛行機だったらしく、リムジンバスの中は既にクラス会状態で、賑やかなことこの上なしといった風体であった。丁度乗り合わせた無関係の乗客には申し訳なかったが…

クラス会ではすぐに学生時代の顔が浮かび、30年経っても、一緒に学び、実験し、苦労(?)して卒業した仲間っていいなあと痛感し、とてもうれしかった。

話は尽きず、2次会会場へと雪崩れ込み、夜遅

くまで飲めや歌えの大騒ぎとなった次第である。その場の詳細は他のシラフに近い方に譲るとして、このクラス会の企画、準備にご努力された幹事の方々に感謝の気持ちでいっぱいである。ありがとうございます。

今度は5年後にクラス会を開催しようということで、解散となった。

今回参加できなかった方は、次回、是非、参加してください。

また、私は長葉同窓会関東支部で毎年、総会のお手伝いをしているが、関東支部では昨年、総会の前に「卒後セミナー」を開催し、卒業生以外へも参加を呼びかけるなど、先輩達が活動を開始している。

今年の6月の総会では、日本大学医学部法医学教室教授の押田先生をお招きし、「医療・調剤事故とリスクマネジメント」という題で基調講演をお願いした。続いて、シンポジウムに移り、各分野で活躍されている卒業生からの発表があり、大変有意義なセミナーであった。

若い後輩達ももっと参加できる同窓会となるためには、魅力ある卒後セミナーの開催も一手段であろう。

講師やシンポジストへの招聘があったら、是非、協力してください。そして、セミナーへ参加してください。以上、クラス会及び同窓会報告でした。

雑

野川¹⁾は、国分寺にその源を発し、小金井、三鷹、調布、狛江を通り、世田谷の二子玉川で多摩川と合流する。数億年前に多摩川が武蔵野台地を削って作り上げた国分寺崖線の湧水を集めながら、野川は武蔵野の地を南東方向へ流れていく。

私が社会人として働き始めて既に四半世紀、そ

感

角 邦男（昭50）

してこの野川が流れる調布市に移って22年が過ぎようとしている。入社してすぐに開発が始まった抗がん剤は10年前に承認され、海外から導入した別の抗がん剤の開発もすでに数年が経過し、ゴール目前である。入社当時53kg程度であった私の体重は今や67kg、ウエストも70cmから86cmまで拡大

の一方をたどり、当時黒々としていた髪はすでにグレー、量も格段に少なくなっている。

先日、芳本教授（生物工学）に、小学生から一般までを対象にしたバイオ・サマースクールという市民講座で講演するよう依頼された。私のテーマは、中国原産の樹木から得られた抗がん物質を医薬品として開発したときの概略であったが、小中学生のみならず高校生にとってもかなり難しい内容ではなかったかと反省している。それはさておき、市民講座では旧製造工学教室の先輩である林田真二郎さん（長工醤油）や後輩の伊藤助教授（生物工学）を初めとした数人の演者からいろんな分野の面白い話題が提供されていた。会場で、北村美江さん（薬用植物園）と山田（松尾）三和子さんに会うことができ、北村さんの研究室でお茶をいただきながら昔話に花を咲かせた。

帰りの飛行機の中で、その昔母の死をきっかけとして、抗がん剤を開発しこの病気を克服したいとの淡い期待を抱いたことを思い出した。就職した会社は食品会社であったが、運のいいことに当時設立されたばかりの医薬品部門では抗がん剤の開発が開始されていた。数年後、同期で入社した私の酒飲み友達が、植物から得られた抗がん物質を基に高い効果を有する物質の半合成に成功し²⁾、その時から基礎から臨床までの一連の仕事が始まった。活性化に関与する酵素の同定を鶴教授（製造工学）にお願いしたこともあった³⁾。臨床開発から市販後にかけては安全対策に苦労させられたが、海外では大腸がんの第一選択薬として広く用いられるようにもなった^{4,5)}。

四半世紀後の現在、昔日の期待は現実として目の前に存在し、その夢は果たされたかにも思える。が、何か未だ本物ではなく、さらにいい物を開発したいという思いが存在する。それは、真の意味でのがんを治す薬を我々が手に入れていないことに起因するものかもしれない。ヒトゲノムの解析やそれに伴う分子標的薬の登場で、抗がん剤に限らず薬剤の開発は大幅に進むかに見える。しかし、

本当にかんが治る薬、副作用が少ない薬としての抗がん剤の開発はこれからが正念場なのだと考えるとき、その思いは薬学を目指して長崎大学に入学し、卒業して社会人になった頃の淡い期待と同種のものとして感じられるのである。

野川は、先日の台風の影響で水量が増し、勢いよく流れている。その流れは、現在の環境が昔とは随分違っているにも拘らず、数億年前と何ら変わることはない。それは、まるで野川が奏でる雄大なパッサカリア⁶⁾の basso ostinato のようであり、人々はその流れとともに様々な変奏曲を日々の生活の営みとして演奏している。そして、私もその中の一人なのだ。

References

1. <http://www.education.ne.jp/kyoiku-center-mi/river/mokuzi.html>
2. Sawada S, Yokokura T et al. Synthesis and antitumor activity of 20(S)-camptothecin derivatives: Carbamate-linked, water-soluble derivatives of 7-ethyl-10-hydroxy camptothecin. *Chem Pharm Bull* 39, 1446-1454, 1991.
3. Tsuji T, Kaneda N, et al. CPT-11 converting enzyme from rat serum: purification and some properties. *J Pharmacobiodyn.* 14, 341-349, 1991
4. Saltz LB, Cox JV, et al. Irinotecan plus fluorouracil and leucovorin for metastatic colorectal cancer. *N Engl J Med*, 343, 905-914, 2000.
5. Douillard JY, Cunningham D, et al. Irinotecan combined with fluorouracil compared with fluorouracil alone as first-line treatment for metastatic colorectal cancer: a multicentre randomised trial. *Lancet*, 355, 1041-1047, 2000.
6. http://www.yamaha.co.jp/edu/student/museum/yougo/youg_ha.html

「シバカリ会」開催の報告

中嶋 幹郎 (昭57)

平成16年10月30日(土)～31日(日)に、長崎市郊外の「やすらぎ伊王島」にて約1年ぶりの「シバカリ会」が、今回も楽しい雰囲気にも包まれながら開催されました。本「シバカリ会」は、長葉の名門?薬剤学研究室の前教授、柴崎壽一郎先生の門下生の集まりで、今では毎年1回のペースを守りながら、ずっと大昔?から開催され続けている歴史ある研究室同門会です。

前回は昨年10月に佐世保市のハウステンボスJR全日空ホテルでの開催でしたが、今回は門下生一同が心から愛している柴崎先生が福岡県甘木市に転居されてからまだ一度も帰られていない長崎市のご自宅へ帰っていただく口実を作るために、平成13年1月以来約4年ぶりの長崎での開催となりました。

今回はシバカリ会会長の伊豫屋先生(昭41)の号令のもと、私と中村忠博さん(昭59)の2名が幹事を担当し、20名の門下生が集まりましたが、柴崎先生の奥様や四国から小西良士先生ご夫妻にも出席して頂くことができ、とても華やかな会になりました。

私はこの「シバカリ会」が大好きで、柴崎先生の門下生となっていて、毎回欠かさず出席させて頂いています。この「シバカリ会」では、学生時代に薬剤学研究室で一緒に過ごした先輩、同級生、後輩と当時の懐かしい思い出を語り合ったり、また今の仕事や家庭の近況等を話し合ったりすることができ、私はいつもその中から元気ももらっていると感じています。しかし一番嬉しいことは、柴崎先生の元気なお姿を拝見しながら、学生時代、薬剤学研究室にいた時と同じように、先生の楽しい大阪弁調子のマシンガントーク「柴崎節」を聞かせて頂けることです。数年前の「長葉同窓会報」にも書かせて頂きましたが、この柴崎節の渦の中にわが身が溺れていく心地良さは、柴崎先生の門下生にしか理解できないかも知れませんが、私にとっては最高に幸せな時間の一つです。今回の「シバカリ会」でも先生の柴崎節はあい

ならず絶好調で、会場は楽しい笑いの渦に包まれていました。

また、今回の「シバカリ会」では、柴崎先生と、ご多忙の中でも毎回遠くから「シバカリ会」に駆けつけてくださる小西先生に、参加者一同から「上質な鼈甲のネックレス」を進呈したのですが、お二人の先生方は、その場でそのネックレスをそれぞれの奥様方へプレゼントされ、「シバカリ会」が両先生の奥様孝行のお役にたつこともできました。

柴崎先生は、最初は「もうあかん」とおっしゃっておられましたが、最後には次も「シバカリ会」を開催してよいというお許しを頂くことが出来たので?、また1～2年後には「シバカリ会」会員の皆さんと柴崎先生が一同に集う会が開催できると思います。今回、欠席された皆さんとは、是非、次回お会いしたいです。

今回も、実に楽しい栄養たっぷりの「シバカリ会」を教え子一同にプレゼントして下さった柴崎先生に感謝するとともに、先生の益々のご健康を祈念して報告とさせて頂きます。

今回の出席者は次の通りでした。なお、間違い等がありましたら何卒ご容赦ください。

出席者

恩師 柴崎壽一郎先生ご夫妻

小西良士先生ご夫妻

氏名	卒業年次
田中博輝	昭39
江藤好信	昭40
黒川征史	昭40
伊豫屋偉夫	昭41
太田和子	昭41
平山文俊	昭41
山中國暉	昭43
田代(旧:吉川)佐夫子	昭48院
相川康博	昭48
森つよ子	昭49
小笠原正良	昭51院
藤井実	昭53

野口 (旧：淀) のり子	昭53	中村 忠博	昭59
中嶋 幹郎	昭57	塩田 英雄	昭60
相葉 (旧：池田) 啓子	昭58	本行 (旧：福田) 千里	昭61 (親子)
磯部 有紀子	昭58	芝口 浩智	昭63



昭和59年卒 クラス会

中村 忠博, 山下 敏孝 (昭59)

平成16年(2004年)が始まって間もない1月11日に卒業後20年目の同窓会が長崎市中華街近くに位置するワシントンホテルのガスライトで行われました。私たちの卒業年度だけの同窓会は卒業後10年目となった平成6年(1994年)以来でした。私は前回の同窓会には仕事の都合で参加できず、同級生と一緒に会するのは20年ぶりとなり、20年経ったみんなの顔を見られるのが楽しみでした。

今回の同窓会は、長崎大学医歯薬学総合研究科伊藤潔君が昭和59年卒業生のためのHPを設置してくれたおかげで、参加できる人、参加できない人の情報をみんなが確認することができました。これまでの同窓会では誰が参加するのか分からぬまま、参加することが多かったのですが、HPの利用でそのような心配も無くみんなも参加できた事と思います。

さて、同窓会の様子ですが、みんな集合時間前にはほとんどが集合しており、同窓会が始まる前から盛り上がりおりました。久しぶりに会う顔、

顔、顔、いろいろな顔が揃いました。私の場合、これまであまり同窓会に参加したことがなかったため、何人か分からない顔があるのでは？と、少し期待する？！気持ちがありましたが、会うと学生時代の顔とオーバーラップしてきます。しかし、20年ぶりに会う顔も多く、顔は思い出すのですが名前が出てこない人も何人かありましたが、気分はすっかり学生時代に戻っておりました。参加者は31名+子どもたち10名という多数の参加者で、大人はもちろん大変盛り上がり、それに負けないくらい子どもたちも大変盛り上がりおりました。あっという間に数時間が過ぎ最高潮に達した頃、松尾富士男君によるヨーグルト体操(イチ、ニッ、サン、シー、ヨーグルト、ゴー、ロク、シチ、ハチ、ウシノチチというのですが、皆さんお分かりになります?)が始まり、さらに盛り上がりました。楽しい時間が過ぎ去るのは早く、一次会が終わりましたが、それから、二次会は久しぶりに浜の町の「カラオケゆー坊」へと流れ込んでいき、夜が

更けるまで、同窓会は続きました。翌日は二日酔いにならなかった人たちは改装された薬学部の見学を行ったようです（私は二日酔いで起き上がりませんでした）。

今回の同窓会の主催者である伊藤君が仕事の都合で残念ながら二次会からしか参加できなかった



のですが、次回は必ず一次会から参加するということですので、今回、参加できなかった方も、次回は、是非とも参加しましょう。次回は卒後四半世紀の区切りの同窓会となり、5年後の2009年(平成21年)に開催予定です。是非ともご参加を！



鶴大典先生喜寿祝賀会

伊藤 潔 (昭59)

平成16年10月30日の土曜日、前薬品生物工学研究室（当時は製造工学）教授の鶴大典長崎大学名誉教授の喜寿を祝う祝賀会が開催されました。場所は長崎市内のホテル「矢太楼」。研究室の10周年祝賀会が催された場所でもあります。芳本忠教授の呼びかけで集まった同門は、大阪市立大学時代の先生方も含めて57名。名簿を眺めてみると、残念ながら欠席されたテキサス大学教授に就任され

た小林龍二氏、テネシー大学助教授の北園アナ氏ら、海外で活躍している人も含めて大学や研究所で活躍している先輩達の数が多いことに改めて気づかされ、鶴先生のご指導の賜と尊敬の念を新たにしました。そんな研究室の喜寿祝賀会は近況報告会からスタートしました。摂南大学薬学部教授の荻田喜代一先生（昭54院）、第一サントリーファーマ(株)開発研究所所長の大末和廣先生(昭50)



のアカデミックなお話があり、いよいよ薬品製造工学初代教授、鶴大典先生の久しぶりの講義となりました。ご専門のプロテアーゼ研究の内容から、なつかしい写真を映しながらのお話。鶴節は「ときおり出るジョークが素晴らしい」との定評があったと記憶していますが、全く衰えない切れ味の良い洒落を交えてのお話に参加者一同時間を忘れて聞き入りました。正座されていた方も多かったように記憶しています。

さて、いよいよ祝賀会の本番。芳本教授の挨拶に続き、志賀寿造氏（ヤクルト本社専務取締役）と元製造工学助手の藤原邦雄先生（昭45，崇城大学教授）の祝辞がありました。大変丁寧だった藤原先生の祝辞は、当時の同門一人ひとりに向けられたものでした。立花寿子氏（昭56）から花束贈呈があり、同門会一同からの記念品目録は林田真二郎氏（昭48，長工醤油味噌理事）と第1期生の村井みどり氏（昭48）から贈呈していただきました。鶴先生のご挨拶。とてもお元気そうです。乾

杯の音頭は安藤實氏（奥本製粉）に執っていただき、祝宴の開始となりました。途中、愛水重典氏（新興産業）と吉田朋史氏（小野薬品工業）からお祝いの言葉を頂戴し、先に紹介した海外で活躍中の卒業生からのパワーポイントのメッセージが紹介されました。長崎の夜景も楽しみながら、時間はあっという間に過ぎ、最後は角邦男氏（昭50，ヤクルト本社）に格好良く閉めていただきました。この後撮ったのが掲載の写真ですが、誰が笑わせたのか、全員が笑顔の傑作となり、研究室を象徴する記念の大事な一枚となりました。本当に良い会であったと思います。最後に、会の開催に当たっては林田真二郎氏と永田修一氏（院昭55）のお力添えがありましたことを申し添え、感謝の意を表します。

鶴先生とゴルフ仲間は、翌日早朝から琴海の方へゴルフに行かれ、秋晴れの素晴らしい一日を過ごされたと聞いていますが、スコアの方は鶴先生に直接手紙で訊かれてはいかがでしょうか？



ケンタッキーだより

下條 正仁 (平2)

現在、私は米国ケンタッキー州レキシントンという町に住んでおり、ケンタッキー大学医学部で研究しています。ケンタッキー州は bluegrass state と呼ばれているように、春から夏は木々の新緑が、また秋は紅葉がとてもきれいな所です。庭にはリスやうさぎが走り回り、サラブレッドの牧場も多く見られます。環境はとても素晴らしいのですが、長崎とは異なり海に面していないのが残念です。その代わり、湖や川がたくさんあり、その自然の景観はとても美しいです。例えば、世界最大級の鍾乳洞、マンモスケープもあり、シーズン中は予約がないと見れない日もあるくらい観光客が多いようです。ケンタッキー州はリンカーンの生誕地でも有名で、また日本で飲まれるバーボンも、ここケンタッキー州で作られています。世界的に有名なケンタッキーダービーはルイビルという町で5月の第1土曜日に行われ、国内を始め世界各国からもたくさんの方が訪れます。この時期にはアメリカで最大といわれる花火大会も催されます。

早いもので、こちらでの生活も9年目に入りました。Lab Techとして研究していた妻は、長女誕生を期に現在は家事に専念しています。私の場合、研究室での英会話といっても専門的で比較的に楽ですが、一歩外に出ると南部独特の訛りがあふれ、理解に苦しむことも少なくありません。その中を、出産、育児、教育をやり遂げている妻は頼もしい存在でもあります。英語という言葉の問題もありますが、いろいろな面で日本とは異なっていますので戸惑うことも多いです。一方で、長女(7才、小1)と長男(3才、幼稚園)は、そんなことは全く関係なくのびのびと毎日楽しく過ごしているようです。特に、長女は月～金曜日は現地校、土曜日は日本人補習校へ通っており、よくやっているなあと感じています。

数年前のある日、大学の研究室へのエレベーターに乗ったとき、一人の男性と乗り合わせました。エレベーターの扉が開くのを待っていると、“下

條さんじゃないですか？”という日本語が聞こえました。これが、ダールさんとの再会でした。ダールさんは当時留学生として衛生学教室で博士課程に在籍していた方です。現在でも驚くほど流暢な日本語を話し、いつも明るくやさしく会話してくれます。また、ずいぶん前に後輩の野村扶君が遠路はるばる遊びに来てくれたことがありました。その際、ミルウォーキーに住む指月さんのところへお邪魔させていただいたことがあります。その際は、とても親切にして頂き大変お世話になりました。その後、すっかりご無沙汰しておりますが、いかがお過ごしでしょうか？

私は神経系に関する研究をしていますので、毎年秋に開かれる北米神経学会に参加しています。この国際学会には、日本からもたくさんの方が参加しています。参加者は8000人を越えるもので、発表会場もかなり広いものです。2年前のオランダの会場では、同級生の下田君とばったり出会いました。お互いに驚きましたが、久しぶりに懐かしい楽しい時を過ごすことができました。また、昨年、同学会がニューオーリンズで開催された際には、旧生化学教室の後輩である志方君とも出会いました。その夜は皆でニューオーリンズの町を深夜まで飲み歩いて、とても懐かしく楽しい時間を過ごすことができました。

最近、博士課程同期の北園アナさんが、テネシー大学で Assistant Professor をしているということをお聞きしました。ここから遠く



はない距離なので、近いうちに再会できたらと思っています。

最後になりましたが、同窓会報をケンタッキーまで送っていただいたりと、長葉同窓会室の皆様、

特に大河内さんにはとても感謝しております。同窓会を盛り上げてくださっている皆様方のご尽力に感謝しますとともに、大河内さんが早くお元気になられることを心より願っております。

科 搜 研 の オ ト コ

八木 洋一 (平9)

多くの薬学部OBの方は、薬剤師として多方面でご活躍されていることと思いますが、私はどういふ訳かその道を外れ、現在、長崎県警の科学捜査研究所に勤務して6年目になります。最近では、「科捜研の女」をはじめ、TV番組に登場することもありますので、科捜研の存在をご存知の方も増えてきたようです。

ちなみに、警察とはいっても、私は警察官ではなく、技術吏員という身分になりますので、制服を着ることも、警察手帳や拳銃を持つことも、犯人を追い詰めて逮捕することも、取調室で机を叩いて、大声を張り上げることもありません。いつも、白衣を着て、研究室内で穏やかに勤務しております。

では、科捜研の仕事について、簡単に紹介させていただきたいと思います。長崎科捜研では、法医係、化学係、物理係、文書係及び心理係から構成され、それぞれ専門的な技術、知識を駆使して鑑定を行っています。法医係では、主に生体試料を取り扱い、その血液型、DNA型の検出や、毛髪の異同識別、骨、顔貌の鑑定等を行います。化学系の業務は、覚せい剤や麻薬といった乱用薬物や毒物の分析、繊維や塗膜片などの微物の分析等で、物理係は、火災原因の解明や、交通事故原因の解析、銃器の殺傷能力の解析等が仕事になります。文書係は、筆跡、偽造文書及び偽造通貨の検査等を行い、心理係は、ポリグラフ(いわゆるうそ発見器)検査を行っています。

基本的には、研究室内での勤務ということになりますが、私は法医係に所属しており、その字のごとく、法医解剖室における司法解剖の手伝いや検査を行うこともあります。ここ数年、長崎で幼

い子供が犠牲となる事件が連続して発生しており、そういった解剖に立ち会うことは、本当に悲しいものです。あのような凄惨な事件が二度と繰り返されないことがないよう、警察組織の一員として自分に何ができるのか、深く考えさせられました。

また、事件が発生すれば、夜中に呼び出されて、その犯行現場に急行し、現場活動に携わることもあります。凶悪事件ともなると、現場には、独特の緊張感が漂っており、捜査員や鑑識でゴった返す雰囲気の中で、自分がやるべきことを瞬時に判断することは、とても難しく、もっと場数を踏んで勉強しなければと痛感させられます。

さて、社会人となってからの時間というものは、本当に早いもので、あっという間に30歳の大台を超えてしまいました。次々と結婚し、子供を持つ同級生たちを目の当たりにし、漠然と30歳くらいまでには、結婚しなければと感じていましたが、すでに35歳くらいまでには…と軌道修正済みです。いつかは結婚したいと考えている独身の方々、がんばりましょう!!

また、30歳になったと同時に、あっという間に10kgほど太ってしまいました。さすがに危険を感じ、昨年の秋からスポーツクラブでエアロビにはまり、2ℓのミネラルウォーターを職場の机に常備し、雑誌「ターザン」を愛読することで、ようやく学生時代の体重に戻りました!ただ、最近、飲み会続きで、また太ってきましたが…。

そろそろ冬が到来し、スキーに鍋にお酒と楽しみも尽きませんが、皆さん、くれぐれもお体には気をつけられ、さらにご活躍されることを願っております。

近 況 報 告

山中 重輝 (平9)

皆さん、こんにちは。なぜか近況報告を書きなさいと天の声がありました。もう決定していると宣告され、私は抗い難い運命にあると思い、10月のひっそりした夜更けにモスバーガーのフレンチフライを食べながら、大学卒業時から今日に至るまでを思い出してみます。

大学院終了後、メーカーへの就職もやめてしまっていて、本来やりたい道に進もうと思い、準備のために1年浪人することにしました。それまでバイトしていた薬局で1年バイトさせてほしいと社長に言ったのが、運の尽きでした。バイト始めて20日後ほどして、「あ、山中は社員になったよ。」と、いつの間にか社員にさせられてしまいました。「なんちゅう、オヤジや！」と思いながらも、その当時の社長は深刻な人材不足と、将来のビジョンが見出せないで苦しそうでしたので何とか助けてあげないとかわいそうだと思い、社長をサポートすることに数年を費やす気持ちへとなりました。

その後、自分だけではどうにもできないと思い、次々と後輩（犠牲者）を引き込みました。1年後輩の秀島義浩君は第1号の犠牲者です。彼は研究室時代からのボクの無理難題を聞いてもらっていたので、今後もそういう役割でいだろうなと考えて引き込みました。そんなものです。第2号は今村朋史君です。彼はよくわかりませんが、バスケット部の後輩ということもあり、またボーっとしていたので引き込みました。その後犠牲者が犠牲者を

増やすという循環型の社会（会社）が形成され、最上元君、長迫信一君、友成正英君、多良圭子さんらが在籍しています。最近長崎の業界で、薬局的宗教団体と揶揄されるトータスグループは以上のようにして信者を増やしてきました。

このように、私たちの会社は若い人材で運営しています。これら若いスタッフで仕事をしていると、若い薬剤師同士が気軽に話し合え交流できる場がないな、と感じました。現在は弊社のスタッフといっしょに、月に1回、所属や病院・薬局の立場を超えた若手薬剤師の勉強会「Ph倶楽部」を主宰しています。お互いに疑問に感じることや、新しい情報・知識を共有する場所作りを行っています。

さて、数年はとんでもない社長をサポートしようと思っていましたが、犠牲者を増やしすぎたこともあり、脱走することが不可能となりつつあります。最近では、薬剤師の人材派遣・職業紹介会社(株)ファルマ・スクエアを立ち上げたこともあり、多忙な日々を過ごしています。弊社に就職する前に私のやりたかったことはもう少し先の未来にとっておこうと思います。そもそも、力も無いのに無茶な話だと、少し大人になって気づきました。私が人間的に成長し、ビジネスとしても成功させることができれば、そのチャンスは必ず来ると思っています。だから、今はこの立場を精一杯全うしようと思います。

平成11年卒業生同窓会

今村 朋史 (平11)

10月9日(土)、長崎市内のBg-café(五島町電停そば)にて同窓会を開催しました。ちょうどおくんちの最終日に重なり、にぎやかな場所で開催したのであわただしく始まったことをこの場を借りてお詫びします。

同窓会を企画しようと思ったのは、この同窓会報の原稿依頼が来たときでした。去年も原稿依頼をいただいていたのですが、正直「めんどうだな」と思い同窓会を開きませんでした。その年の同窓会報を見て、来年こそはしないと反省しまし

た。原稿依頼をいただいたのは8月中旬ぐらいだったと思います。それから、学年全員のメールアドレスを人を伝って集めました。連絡先を集めているときに同級生のみんなが同窓会を心待ちにしていたのがわかり、去年の同窓会をしなかったことをまた後悔しました。みんなの協力で二週間ぐらいでほぼ全員のメールアドレスを集めることができ、それからはスムーズに同窓会を開くまで進んでいきました。

同窓会に集まってくれたのは30名、全員で約80人なのでかなりの数の人が参加してくれました。そのほかにも参加したいのに都合がどうしてもあわず来られなかった人もたくさんいました。30名の中には、遠くは茨城から当日に駆けつけてくれた人もいます。しかも台風22号が関東地方を直撃した日で、その方が乗った飛行機の次の便は欠航になるという学生時代には見られなかった運の良さが見られました。

バイキング方式の食事と飲み放題で、席はクジにて決めました。学生時代にはあまり話しをしたことのない人とも一緒にテーブルになり、懐かしい話で盛り上がっていました。集まった人の中には、病院で働いている人、調剤薬局で働いている人のほか、製薬会社、薬局を経営している方など様々でした。学生時代と違って頑張っている人がたくさんいました。

自分が幹事だったということもあり、かなりいいかげんな計画で、二次会の場所すらおさえてなかったので一次会はほとんどその場に居らず場所探しに走り回っていました。というのも、一次会さえ決めていれば二次会はバラけるだろうと考えていたのでおさえていなかったのです。ですが、参加してくれた人ほとんどが二次会も行きたいということで、かなりあわてました。このことから同級生の仲のよさがわかると思います。

二次会の場所もなんとか手配でき、盛り上がっている会場に戻るとすぐに終わりの時間となり、最上くんが一本締めでビシッと締めてくれました。

二次会は出島ワープの2Fにある St. Andrews jigabar inn で行いました。海が見えるテラスでゆっくりと飲みながらしっかりと話し込んでいたのが印象的でした。二次会も終わりに近づき、何人かでラーメンを食べに行こうと話してい



るとそれも次第に広がり、三次会はラーメン屋になりました。20人近くが出島ワープから思案橋の李軒（店員のほとんどが中国からの留学生たちで雰囲気も味もよくお勧めです）まで歩き、そのせいかラーメンから水餃子、チャーハンまで軽く食べていました。そんな感じで同窓会も終わりました。時計を見るとなんと3時近く！あっという間に時間が過ぎました。

みんなも喜んでいたので、来年も必ず開催した



いと思います。今年参加できなかった皆さんもぜひ参加してくださいね。今回は幹事がいろいろぬけているところがあり、カメラを借りた今西さんをはじめ皆さんに迷惑をかけました。ありがとうございました。

余談ですが、その翌々日（11日）に同級生ゴルフコンペを行いました。たった4人ですが…。最終ホールまでもつれる好勝負であったことを付け加えさせていただきます。



第一回薬品分析化学研究室（黒田研究室）同門会報告

大山 要（平12）

去る9月18・19日、福岡県久山町（レイクサイドホテル久山）に於いて、薬品分析化学研究室同門会を、初めて開催致しました。我が薬品分析化学研究室は、黒田直敬教授の就任と同時に開講され、早いもので5年が経過しました。これを機に、同門会開催の話が持ち上がり、一番の古株である私が幹事を務めることとなりました。早速日時・場所を決定し、参加の有無を全員に確認したとこ

ろ、28名（残念ながら、当日3名欠席）が参加するとのことでした。これも、皆一様に研究室を懐かしみ、充実した時間を過ごした証であると感激するとともに、そうした環境を築いてくださった黒田先生をはじめとする先生方にあらためて感謝しました。

さて同門会当日、夕方には全員が無事顔をそろえることができ、ホッとしたところで、すぐに料

理を囲んでの宴会となりました。黒田先生の乾杯と研究室の近況報告が始まると、あちこちで歓声が響き、それぞれが学生時代と変わらぬ笑顔を見せていました。その一方で、話題の中心は仕事や



結婚へと移り、時の流れも感じられました。卒業生が皆自然と、黒田先生の周りに集まり、先生が食べる暇もないくらい盛り上がっていたのが印象的でした。宴会は予定を一時間近く過ぎてようやく、大庭義史先生の得意な？万歳三唱でお開きとなり、各部屋に場所を移して深夜3時頃まで続きました。翌日は豪華な朝食バイキングをいただき、次回はまた5年後の開催を約束して散会となりました。今回出席できなかった卒業生の皆さんと、これから卒業される皆さん、次回同門会では是非お会い致しましょう。

最後に、超多忙中、駆け付けて下さった黒田先生とお集まり頂いた参加者、また準備にご助力頂いた一番ヶ瀬さん（院平15）にこの場をお借りして感謝申し上げます。



末廣（修2）

森田（院平13） 木下（平13） 杉原（平13） 中村（平14） 入江（平14） 伊原（平13） 大庭先生（平15） 池（平15） 一番ヶ瀬（院平15） 大山（平12） 藤井（平15）
 岸川（平10） 荒川（平15） 大志茂（平12） 森中（平12）
 白澤（平16） 濱辺（平16） 赤司（平13） 小山田（平13） 黒田先生 井上（平11） 村崎（平12）

卒業を前に思うこと

坂田 真人 (平15)

私は現在、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の博士前期(修士)課程2年で、来年3月には卒業を控えています。長崎に来てもう5年以上経つのかと思うと、本当にあっという間であったような気もするし、いろいろな事があって長かったなあという気もします。朝夕の風が日に日に冷たく感じられる秋の日に、その長かったり短かったりの大学生活を振り返ってみました。

5年前の春、合格発表を友達と見に来てアメフト部に胴上げされてから、私の大学生活は始まりました。それから当時の修士2年であった目良国寛先輩の勧誘を受けて、後の私の大学生活の中心となる野球部に入部しました。目良先輩との出会いがなければ野球部に入ることはなかったし、私の大学生活はつまらないものになっていたと思います。とにかく私の学部での4年間の思い出は、ほとんど野球のことばかりです。キャッチボールもまともに出来なかった私を、一から指導してくれた学年が一つ上の鈴木秀明先輩には大変感謝しています。毎年ゴールデンウィークに開催される九薬連大会に向けて、朝早くからみんなで練習したのも早起きはずらかったけど楽しかったです。初めての九薬連大会の試合(対熊大戦)で、最終回に代打で出してもらって三球三振した日から2年後の最後の大会で、同じピッチャーからホームランを打てたことは今でも忘れられません。結局一回も優勝することは出来ませんでした。みんなやった朝練や合宿、一緒に味わった勝利の味や敗戦の悔し涙、練習方法や考え方の違いでの衝

突などいろいろあったけど、何より最高のメンバーで野球が出来たこと、これが私にとって一番の思い出です。

ここまで野球のことばかりで、他に何もなかったのかというとそうではありません。やはり学生の本分である勉強も大変でした。どの科目も大変難しく、単位をとることは私にとって容易ではありませんでした。各科目の担当の先生方や当時の学務係の五島博史氏には多大なご迷惑をおかけしてしまい、この場をお借りして?お詫び申し上げます。こんな学生であった私も、何とか国家試験を乗り切り、今では薬品生物工学研究室の修士2年です。これから修論に向けてラストスパートと頑張っている最中です。

私は、来春長かった学生生活を終え、社会人として新たなスタートを切るわけですが、私より2年前から社会人として働いている同級生も少なくありません。そのような友達や様々な分野で現在活躍されている先輩方に、いろいろとアドバイスやご指導を受けながら、早く一人前の社会人にとっています。同級生の皆さん、お元気でしょうか?私はこのような感じで相変わらずの人間です。私たちの学年は個性的な人たちが多かったので(私も人に言えないですが)、久しぶりに皆さんと会ってみたいです。出来るだけ近いうちに同窓会したいですね!「坂田では出来ないだろうからオレが開いてやる!」という幹事さん募集中です(笑)。皆さんと逢える日を楽しみにしています。

慰霊碑の掃除を終えて

永川 貴 (平16)

原爆記念日の一日前である8月8日、医学部の裏にあるぐびろが丘の慰霊碑の掃除がありました。今年も、同窓会長の西脇先生を先頭に約25名の学生が落ち葉を拾ったり、側溝の土をあげたりして慰霊碑周辺をきれいにしました。

このぐびろが丘には当時射的場があり、防空壕として使用していたとのことでこの慰霊碑は、原爆によりこの壕周辺で被爆した先輩方の死を悼んで建立されたということです。清掃終了後、慰霊碑に線香をあげ田崎和之先生(昭22)のお話をお聞きしました。先生は、お話の中で富田恒夫先生(昭20)の文章を朗読され、原爆落下当時の殺伐と

した様子や戦争の悲惨さを私たちに伝えてくださいました。

私は、戦争について映画や教科書などを通してしか知らないため、なかなか実感がわかず、日々の生活が平和なことは当たり前だと思って過ごしています。しかし、戦争を体験された方のお話を聞きすると、戦争の怖さや悲惨さをよりリアルに知ることができ、今の生活がいかに恵まれたものであるかということを実感できました。こうした体験は普段なかなかできないため、私にとって貴重な体験となり、来年以降も積極的に参加したいと思います。

平成16年度 九葉連を終えて

ト部 奏 (学部4年)

今年も5月1日～3日に熊本大学において九葉連が行われました。今回の参加校は、福岡大学薬学部、第一薬科大学、熊本大学薬学部、そして長崎大学薬学部の4校で、準硬式野球、硬式テニス、軟式テニス、サッカー、バスケットボール、バレーボールの6球技が行われました。4年の僕にとって今回は最後の大会となりました。僕は、バスケットボール部と準硬式野球部に所属していたので、競技初日の5月2日にバスケットボール、翌日の5月3日に野球の試合に出場しました。

バスケットボールは今年も例年と同じように第一薬科大学、熊本大学、長崎大学の3校の総当り戦で争われ、長崎大学は第1試合は熊本大学、第2試合は第一薬科大学と対戦しました。僕は過去2回九葉連でバスケットボールの試合に出場したことがありましたが、その中で1勝も挙げる事ができませんでした。今年は4年が多く、仲もよくて、個人的にすごく居心地のいいチームで、ぜひ九葉連で1勝を挙げたいと思っていました。第1試合の熊本大学戦は序盤からリードを許す厳し

い立ち上がりになってしまいました。熊本大学はディフェンスが厳しく、なかなかいい形でシュートまで持っていきませんでした。僕たちもメンバーチェンジをして何とか流れを掴もうとしましたが、なかなかうまくいかず、前半で20点強の差がついてしまいました。後半、必死に追い上げはしましたが、結局この点差がひびいて11点差で敗れてしまいました。そして第2試合の第一薬科大学戦は序盤は点差も開くこともなく、悪くない立ち上がりでした。しかし、第2、3クォーターになると、なかなか点数が入らなくなり、徐々に点差が開いてきました。第3クォーター終了時にはまた20点強のリードを奪われてしまいました。最終第4クォーター、初めは全員4年生で試合に臨みました。このチームのベストメンバーではなかったけど、最後に同級生5人で一緒にプレイができたことがとても嬉しかったです。第4クォーターでは最後の粘りをみせましたが、熊本大学戦と同様に11点差で敗れてしまいました。第3試合で熊本大学が第一薬科大学を接戦の末破り、

昨年に続き2連覇を達成しました。女子も健闘しましたが、2敗で3位という結果に終わってしまいました。念願の九葉連初勝利は叶いませんでしたが、すばらしいメンバーと一緒にバスケットボールができたことを誇りに思います。

野球は福岡大学、第一薬科大学、熊本大学、長崎大学の4校によるトーナメント戦で争われ、5月2日に準決勝の2試合、5月3日に決勝、3位決定戦がそれぞれ行われました。僕が入学してから3回大会がありましたが、すべて2位という悔しい思いをしてきたので今年こそ優勝したいと思っていました。5月2日の準決勝では福岡大学と対戦し、16対6で6回コールド勝ちし、決勝で熊本大学と対戦することになりました。これは2年連続して同じ顔合わせで因縁の戦いでした。この試合、僕は6番セカンドで出場しました。試合は序盤、熊本大学のペースで始まりまして。2回に2点、3回に3点を入れられ5回終了時までに5対2とリードされてしまいました。そして6回表、熊本大学は大きな大きな3点を入れ、スコアは8対2と6点差に開き、第3者からみれば勝負あったかに思われました。しかし、リードされている僕たちからすればこのまま終われるはずはありませんでした。6回裏、今までが嘘のように打線がつながり、相手のエラーも重なって、この回一挙6点を奪い、なんと同点に追いつきました。さらに7回、熊本大学は無得点に終わりましたが、僕たちは前の回の勢いが衰えず、2点を加え、10対8とついにこの試合初めて僕たちがリードを奪いました。7回が終わり、僕はそのまま絶対に勝てると思っていました。8回、熊本大学は執念で1点を返してきました。その裏、僕たちは追加点を奪うことができず、10対9という1点リードの状態最終回を迎えることになりました。9回表、1人目のバッターはサードゴロでしとめましたが、

次のバッターのときエラーが重なり、ノーヒットで10対10の同点に追いつかれてしまいました。次のバッターをショートフライでアウトにし、ツーアウトになりましたが、ここから連打を浴びてしまい、この回に一挙に4点を奪われ、13対10と3点差をつけられてしまいました。チームのキャプテンでもあり、この試合、ずっと投げてきたエースは最終回のマウンドで涙を浮かべていました。おそらく、ものすごいプレッシャーと恐怖心を感じていたと思われます。しかし、9回表の最後のバッターにはストレートのみで真っ向勝負し、三振で打ち取りました。このピッチングにキャプテンの大学での野球人生のすべてが集約されていたように感じました。9回裏、ツーアウトから2人のランナーを出したものの、最後は1番バッターの大飛球を熊本大学のレフトがファインプレーでキャッチし、ゲームセット。息づまるような乱打戦に幕が下ろされました。僕たちのチームはほとんどのメンバーが泣いていました。しかし、僕は涙が出ませんでした。確かにすごく悔しかったけど、なぜかすっきりとした気持ちになっていました。本当に最後の試合で最高の試合ができたと確信しています。こんな経験をさせてくれたチームのメンバー全員に感謝しています。準硬式野球部に入部してからいろいろあったけど、最後まで続けて本当に良かったと思いました。

今回の九葉連、長崎大学は全体的に良い成績をあげることはできませんでした。しかし皆ベストを尽くしていたと思います。九葉連では勝敗はもちろんですが、その結果が生まれるまでの過程も醍醐味の1つだと思います。次回の九葉連からは応援する立場になりますが、後輩の皆には個人が、そしてチーム全体がベストを尽くし、いい成績を挙げるだけでなく、すばらしい思い出も作ってもらいたいと願っています。